

キノの恋

羽田 茂

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

甘酸っぱい(?)ラブコメです。

キノがやけにデレやすいですが、広い心と二次創作だからという免罪符でお許し下さい。

追記：発作的にシリアスが出ます。仕方ないんです。発作なんですから。もう二人が幸せになるなら過程なんていいんです。ほかあそう思います。

目次

始まりの話 (1 / 3)	1
始まりの話 (2 / 3)	25
始まりの話 (3 / 3)	54
映画館の国 (1 / 1)	82
人でなしの話 (1 / 2)	110
人でなしの話 (2 / 2)	133

始まりの話（1／3）

「硝煙しょうえんの臭いが立ち込める廊下を全力で駆ける。

自分の肺から吐き出される空気は熱く、動かす足は今にもほつれそうだ。

ブーツが地面を蹴るたび、足元に転がる小石や壊れた壁の破片がザツザツと音を立てた。

「…………ツ」

ボクは柱の陰に体を潜り込ませ、はあはあ、と胸を上下する。

立っていることすら辛く、壁に合わせるように背中を擦りながら、ボクはそのまま崩れ落ちた。

その瞬間。隠れた柱の角が澄んだ発砲音とともに弾けた。

破片が微かに髪を揺らす。

心臓の音がうるさい。大粒の汗が鼻筋を伝って、地面に垂れ落ちた。

「くそ…………」

ときどきある、けれどさして珍しくもない普通の依頼だった。

廃城に住み着いた山賊の討伐。報酬としてエルメスの燃料、携帯食料、現金。

達成できる。ボクはそう判断し、依頼地へと足を運んだ。

今度こそもしかしたら死ぬかもしれない、そう頭で考えていた。でも本当は、それと同時に頭の片隅で自分は死なないと思っていたのかもしれない。

その結果が現状と繋がった。

単純な話、自分よりも格上がいた。

最初のうちはうまくいっていた。確実に一人ずつ仕留めていった。

でも、そこに長身の男が現れた。

そこからはあつという間だった。

技術で負け、体力で負け、気力で負け、読み合いに負けた。

不意を突いたつもりが、逆に突かれ、罫を張られた。体に弾丸がいくつも擦った。

未だ体を貫通していないのは、果たして運が良いからか。

そんなことを目を閉じながら思う。

足音は近付いてくる。わざとそうしているのか、小石を蹴り飛ばしながらゆつくりと歩いてきている。

死臭が近づいたような気がした。

「……」

相手は四人。

カノンに残った弾はあと一つだけ——きつとここが僕の死に場所になるだろう。ボクは口を小さく開け、深く溜息を吐き出す。

「ごめんなさい、師匠」

誰かが言っていた。銃弾は必ず最後の一発だけ残しておけて。それが、自分への饞になると。

ボクは上半身の筋肉を鋭く動かし、柱の陰から半身を出す。

そして、——最後の一発を発砲した。

「ガッ」

放たれた銃弾は長身の男の腹部に収まった。最後の一発は使わないだろうと、たぶん彼はそう判断したのだろう。それが、油断につながった。

男は短い悲鳴を上げ、だがその目はすぐにボクを捉えた。

彼は素早くパースエイダーを構え、ボクへ向かって火を噴かせた。

ボクはそれを見届けるより早く、上半身を陰へと戻す。

柱の向こう側から、男の罵声と絶叫が聞こえてきた。

ここまで落ち着いて指示を出し続けていた男の絶叫に、自分の口角が微かに吊り上がるのを感じる。

「……………まあ……つ、みろ……………」

絶叫は低い呻き声へ、そして男たちに何か言う声。そして、その声はやがて止まった。それと同時に、止まっていた男たちの前進が再び始まった。

柱へ飛んでくる、無数の弾丸。パパパパと砂埃が散る。

「やっど追い詰めたぞ、溝鼠野郎が」

やがて、その足音はどんとどくとボクへと近付いてき、やがて目の前で止まった。

彼らの表情は逆光のせいだろうか、黒く塗られていてよく見えない。

「よくも…、よくもクライルを、ベネアを、ライセスを、アレンを、シグを、トニオを、バズを、トレイルを、マジリを、ルイを……仲間達を殺してくれたな」

男の一人がそう言いながら、手に持ったパースエイダーの標準をボクへと合わせた。

「……ちく、しょう——」

眼前に突き出されたパースエイダーに対処する術はもう残っていない。

予備のナイフも、爆弾もすべて、長身の男に使い切ってしまった。

もうあとは、彼らのパースエイダーが鳴るのを待つだけだ。

冷たい汗が額を、背中を流れる。濃厚な死の臭いが肺を満たし、ボクは歯が震えるのを噛みこらしながら、ギユツと眼を閉じた。

しかし、何秒過ぎただろうか。

「……………？」

いつまで経ってもその時は来なかった。

ボクは固く閉じた目をそつと開け、下げていた頭をそつと上げる。

そして、ゆっくりと前を見て――

体に鈍い衝撃が走った。

男の足が、自分のお腹に深くめり込んでいた。

「が……ッあー！」

男はそのままグリグリとボクのお腹を踏み続ける。

対して中身の入っていない胃の中身と背骨が、外部からの衝撃と背面の固い壁とに圧迫され、内側がこぼれだしそうだった。

「糞が！糞が！糞が！！」

男の罵声が鼓膜を震わす。

ボクは糸が切れた玩具のように地面に転がり、そのまま何度も激しくせき込んだ。

「いっほっ！、けほっ、んぐうッッ」

鳩尾にブーツが飛んででき、脇腹を固い靴底が繰り返し踏みにつける。

そのたびに内臓が暴れ、胃液が逆流し、喉が焼ける。

肉を叩きつけるような鈍い音が、頭の中で何度も弾ける。

「……ッ！！あ……ッぐ――」

痛い。痛い。痛い。痛い。

パースエイダーの鋭利な痛みとは違う、人を殺すための痛みとは違う。人をなぶるための痛み。

師匠の訓練で、体の痛みは何度も体感した。でも、今、師匠がどれだけ手を抜いていたのかが身に染み込んだ。

同じ位置に重複して落ちてくる踵に、気付けばボクの涙腺は壊れて、視界がぐちゃぐちゃに歪んでいた。

「ぐうううッ」

突然髪を掴まれる感覚とともに、そのままボクの頭が無理矢理浮いた。

「ぐ……ッうーあ、あああああ!! ああああああああああ!!」

頭と髪が嫌な音を立てるのが、聞こえるみたいだ。

噛み殺していた悲鳴と叫びが喉から漏れ出て、一瞬で堰き止めることが出来なくなる。

ボクは男の手に両手の爪をくい込ませるように掴み、せめてもと噛み付く。

「グッ……このッ……糞餓鬼が!!——殺してやる、ぶっ殺してやる!!」

そんな声が真正面から聞こえ、廃城の廊下に響き渡る。そして、その声に被せるように、パアンツと高い音が鳴った。

「ツツ——」

頬に鋭い痛みが走る。

そして、同刻。横腹に拳が埋まった。

激痛。

「ああ——ああああああ、あああああああああああああああッっ!!」

犬歯と爪が男の手を離れ、ボクは地面に落ちる。

自分のお腹をかばうように抱きながら、地面に頬を、額を擦りつけて絶叫する。

自分がもうどの方向から殴られているのかも分からない。

視界が赤色に染まって、衝撃のたび視界が白く閃光した。

見開いた視界に、憤怒に染まった男の表情が視界いっぱい広がる。

突然、喉を深い圧迫感が満たした。

「よくも、よくもやってくれやがったな!!」

気道が絞め付けられ、頭の中の空気が急速に冷えていくような感覚がボクを浸した。

その手を外そうと、必死で両腕を伸ばす。しかし、結果は分かり切っていた。

喉を絞める太腕。打撲と擦り傷だらけの細腕。

「ぐうツ——あッ……ああッ——」

徐々に意識が白んでいく。

「……………ない」

死にたくない。

最期に、銃声が聞こえた。

× × ×

男は初め、自分に何が起こったのか分からないという顔をしていた。突然胸に衝撃が走ったと思ったら、そこから赤い液体がばしやばしやと流出し、そこを中心として服の色を変えていつている。

「あ？」

一肌の白めな男の胸にできた赤い楕円は、どんどん大きく広がっていく。それがある程度の大きさになると男は地面に倒れて動かなくなった。

「え」

二人目は後頭部に穴が開いた。

頭の三分の一が破裂し、脳髓をまき散らしながら、四人の中でもっとも身長が小さかった男は、地面に横たわった。結局、一言も言葉を発することなく絶命した。

「…だ、誰だ!!」

残った二人の一人がパースエイダーを構え、俺の方向へと向けた。その結果、偶然にも目が合った。

四人の中で一番若作りの男だった。

こちらを向いた顔にはただ驚愕を浮かべており、仲間を殺された怒りさえ覚えていないようだ。男は怯えた表情を貼り付け、口を大きく開けた。

「敵だ——」

それが彼の遺言になった。

三発目の銃弾は、男の口の中へと入っていった。

延髄を破裂させ、脳へと伝わった衝撃が彼の活動を止めた。毛細血管が切れたのだから、その鼻からダラダラとだらしなく鼻血を垂らしながら、地面に顔から落ちた。

その傍では、一番最初に死んだ男が床に池を作っていた。男はガクガクと悶えながら、呼吸をしていた。

そして、誰かの首を絞めていた四人目の男が大声で吠えた。

口を大きく開き、喉を震わせる。

男は少年を地面に投げ捨て、振り向くように銃口を俺の方へ向けた。すぐさま俺は、廊下の角に身を滑らせる。その一秒未満後に、背中から銃声が聞こえた。

そして何回目銃声が鳴っただろう。発砲音が止まった。

「わるい、一発で殺してやれなくて」

俺はそうこぼしてから、死体に向けて歩き出す。

生存者ゼロ、全員が正しく死んでいる。

小池はかなり広がって、暗い緑の服を着た男たちを赤黒く染めていた。

俺は、その池の中に浸る一人の少年に目をやる。

黒いシヨートカットに、全身を黒で統一した服装。顔の造形は綺麗に整っていて、たとえ女性だと言われても違和感はないだろう。だがその顔には男たちの血がベツトリと付着し、その綺麗な顔はいくつもの擦り傷や切り傷、赤く腫れていたりと凄惨なものになっている。

「……他の奴らを殺したのは君か？」

問うたところで返ってきやしない。そう思いながら彼に投げかける。

ここに来る道中には他にも何人もの男の骸が転がっていった。

正直、凄まじいと思った。

おかげで、といえば聞こえは悪いが、おかげで思っていた以上に楽に依頼を終わらせることができた。

「とりあえず、これで依頼は終わりだ」

そうひとり呟き、俺は血だまりに沈んだ男たちの懐をまさぐる。

そして中から、いくつか使えそうなものを選別して自分のバッグの中にしまっていく。

携帯食料。薬。替えの弾。

初めは、あたたかさの微かに残った人だったものの感触に、嘔吐しそうになりながらしていたこの作業だが、今ではすっかり慣れてしまった。

ごめん嘘。正直気持ちが悪いし、化けて出てきそうでこわい。

そうこう複雑な気分で緑色の奴らと少年の懐をまさぐる。

そして最後に、俺は少年の死体に手を合わせ軽く頭を下げた。

「……めん」

俺が見たとき、彼はすでに四肢を垂らして動かなくなっていた。

あと少し早く来ていれば。そう意味のないことを思う。

俺は彼が離さず手に持ったパスエイダーに手を伸ばす。

「もらっつてくよ」

そう断つてから、引き金に置かれた彼の指に手かけ——

「ケホッ」

目の前の少年が、苦しそうに咳を吐き出すのを聞いた。

俺は慌てて彼の首元に手を当てる。

「脈がある…それに、あたたかい」

まさか、生きてるのか？

俺は顔を上げ、少年の顔を見た。

× × ×

少年を背中に背負い、今まで来た道を引き返す。

旅の道具が詰まったバッグをお腹の前に掛け、気分は小学校の下校時によくやらされたWランドセル背負いだ。

硝煙の臭いが染みついた廃城跡を抜け、低い草木が生える平原に出る。

人が通り続けた地面は草木がなく、じやりじやりとした黄色い土を表にさらしていた。

俺は背中の中の少年をいったん背負い直してから、また歩き出す。

依頼対象の全員が死んでいることは一応確認したが、まだ気が抜けない

もしかしたら追手が迫ってきてたりとかあるんじゃないかとか、そういう不安が脳内をちらつく。

出来れば今すぐにでも少年の傷を確認したいところだが、自分の命と安全が最優先

だ。

あと付け足すなら、心の平穩も。

逃げるんだよお!!

「…とりあえず、水場に行こう」

背中からものすごく鉄臭い臭いがする。あと、彼に接面する衣服が涙で濡れていくのを感じる。

俺は道から外れて、依頼前に偶然見つけた川へと歩く。

えっちらおっちらと全身を汗まみれにして到着したころには、あたりは夕焼けに染まっ

て、遠くの空からは薄墨のような黒が混ざり始めていた。

「つい…たあ」

俺は少年を草むらに下し、地面に倒れるように座り込む。

「あー……とりあえず、傷の確認…、を」

しかし、いつまでもだらだらとしているわけにもいかず。

すぐに再び立ち上がり、バックから布を取り出し、俺はそれを川の水で濡らした。手持ちのランプで灯りを確保し、彼の顔に塗りたいくらいに血液を拭っていく。

「ほんと、綺麗な顔してるな」

布が赤く染まっけいき、付着していた血液が取れていくとともに、目の前の顔がいかに整っているかがよくわかる。

長いまつ毛に。柔らかかそうな唇。病的な白さとは違う、あたたかな白い肌。

男の俺でもその顔について見惚れてしま——いや、ちやうねん。ちやう。別にそういう趣味の持ち主だったりとかそういうんじゃないから。

手に持ったガーゼや薬で応急処置をしながら、

「俺もこんな顔だったら人生もつとたのしかつたんだろうなあ」とか、「さぞかし行つた国々でモテモテなんだろうなあ」とか「どうせなら、チーレム系の世界に飛ばされたかつたなあ」と、一瞬でいろんな言葉が頭の中で浮かんでいく。

そして、そのどれもが現実になることはないだろう、と俺は深々と溜息を吐いた

……凹む。

この少年が元気になつたら、おこぼれを期待してついでいくのもありかもな、とどうせやりもしないアホな計画を立てながら、俺は少年の茶色いコートに手をかける。

ボタンを外して黒のジャケットを脱がすと、その下に着られていた白いシャツが露になった。

シャツインをしているので、俺は金属部品を外すのに苦労しながらベルトを外し、シャツの下三つほどのボタンを開ける。

「うっ……！」

そして、その凄惨さについ眉を顰めた。

——酷い。

彼のお腹は青紫色に変色しており、皮膚の内側から小さな赤い斑点がいくつも浮き上がっている。

医療関係の知識については素人以下の俺には、視覚的に外部の状況を見て判断することしかできない。

下手すると、内が逝つちやつてるんじゃないかと、分からないからこそ、素人なりの嫌な想像が次から次へと頭に浮かんできた。そして、目の前の光景が俺に向かって想像じゃすまないぞと、物語っているようにも見えた

「……」

俺は次に、彼のズボンのチャックへと手を伸ばす。ジツパーを下ろし、ズボンを少しずつ下へとおろす。

そして——水色のストライプのはいったパンツを見た。

「……」

……少年、そういう趣味なのか。

脳裏に微かながらちらついていて、綺麗な顔へのやつかみとか嫉妬とかが、大気圏を

越えた空の向こう側へと消えていく。

この気持ちに名前を付けるなら、そう……、やさしき。とかだ。

俺は優しい気持ちになりながら、目をそつと閉じた。

そして、ずりつずりつと無言でズボンを下す。

下半身はパンツは見えないよう注意しながら確認しよう、そう心にも刻んで。

大丈夫。俺は理解ある人間だから。

女装と男装の国とかも行ったことあるから。初恋の人がまさかの男で、心の中のいろんなものが儂く散って、ついでに言えばあと少し気付くのが遅ければ肉体的なアレも儂く散りかけてたこととかはもう気にしてないから。もう忘れたから。もう乗り越えられたから。もう何も怖くないから。——…あ、泣ける。

そんな冗談でも考えていないと、気が気でない。

何人も人を殺したし、それと同じくらい人の手助けもした。

しかし、今回のような状況は何気に初めてだ。

少年の素足には大量に打撲の跡や、切り傷や擦り傷が浮かんでいる。

薬を塗り、包帯を巻き、絆創膏をぺたぺたと貼る。最後に、その後下を隠すように野宿用の毛布をサツと掛けた。

そして——

「鬼門だ」

そう小さく呟き、俺はまるで親の仇でも見るような視線を彼の上半身へ向けた。そこには小さくとも確かな二つの双丘。

ワイシャツの下に來ているのは、果たして女物の下着か、女物のブラジャーか、それとも女物のスポブラか。

パッドは確定してるから、どのみちギルティだ。

だからどれが来ようとも、俺は大声で「アウツ!!」と叫ぶ自信がある。

俺は今度は、開けていなかった上のワイシャツのボタンを外していった。白く、なめらかな曲線を描いた鎖骨が。

そして、その胸部には――。

「……は？」

――何もつけられていなかった

小ぶりの乳房と、その先にある二つの桜色の楕円。

「え、あ……女、の子？」

俺はその光景に一瞬喉を詰まらせた。

一瞬にして体内の血液が熱くなるのを感じる。

だが、それをすぐに頭の中に沸いた疑問が打ち消した。

「……なんでこんな娘が、あんな依頼なんて受けてんだ？」

華奢な男の子があれだけの人数を殺害した現場を見ただけでも驚愕した。

なのに、高校生、くらいの少女がアレだけのことをしたのか。

遠く離れたハズの硝煙の臭いが戻ってくる。

爆薬を使ったのか、損傷の激しいものもあった。正確無慈悲に頭の中身をぶちまけたものもあった。いくつものトラップの跡があった。その足元には死体が転がっていた。

「はは……、…世界って広いな」

この華奢な体であれをしたのか。

しばし、乾いた笑いをこぼしたから、俺は少女の上半身をくまなくチェックする。

わき腹にできた切り傷、打撲に薬を塗り、包帯をぐるぐると巻く。そして、彼女の腕もほかの場所と同様に薬と包帯を巻いた。

その後、小さな裂傷にちよんちよんと薬を塗っていく。最後に、下半身だけにかけていた毛布を上半身にもかかるようにかけ直した。そして、近くにある枝を拾い集め、簡易的な焚火を作り、近くにあつた倒木に腰を下ろした。

「さてと……」

次どうするか。

正直、俺がしていた処置にどれくらいの効果があるかわからない。

以前ほかの旅人がしていたのを、うろ覚え、見よう見まねでやってみただけだから、間違っているかもしれない。

可能な限り早く、プロに診てもらった方が良いだろう。

だがそうなれば——

「どうする………国に引き返すか？」

だが俺はその案を、自分の頭を左右に振って追い出した。

この時間から？ 体力だって無尽蔵じゃない。危険だ。そもそもどうやって運ぶんだよ。

ぐるぐると頭を回し、それならばどうするか。それならば——と答えを探す。

その時、

「エル……メス……」

少女の小さな呟きを聞いた。

ひどく驚きながら、彼女はエルメスなる人物の名前を呼ぶ。

「つ……あああ！もう分かったよ!!」

俺は倒木から腰を上げる。そして、自分のバックを体の前へ掛けた。

見とけ。

ぬくぬくとお人よしの国で温室栽培された、現代っ子の甘さをなめるなよ。

「やってやるよ」

ここから何時間もほぼ全裸の女の子の体温を合法的に味わうことができるんだ。素人童貞青少年の俺にとってはご褒美だぜ！

そのエルメスとやらが彼氏が婚約者か知らんが、せいぜい自分の女の裸を他人に見られたことを泣いて後悔するがいい！畜生！

俺は斃されている少女の手を握り、へたくそに笑いかける。

「俺が君を助けてやる」

もし誰か第三者がこの場にいたならば、こんな臭いセリフなんて死んでも言わなかっただろう。

もし少女が眼を覚ましていたならば、こんな気取ったセリフなんて死んでも言わなかっただろう。

もし、テンションが振り切れていなければ、こんな恥ずかしいセリフなんて、絶対に言わなかった。

だが——その時少女が薄く瞳を開けた。

そして、俺の手を弱弱しく握り返し、

「…ありがとう」

そう返してきた。

「なっ……いっ！」

起きて!?

そう思ったが、彼女の瞳はすでに閉じられ、もう何も返すことはない。

俺は横になっていた少女の体を起こし、何とか自分の背中に乗せ、

「さすが美少女」

さすが美少女——汚い。

男の扱い方をよく心得ていらっしやるようだ。あの場面で、あの瞬間で：ドラマかよ。

あのテクニクでいったい何人の男を落としてきたのか。小さい体だが、さぞかし経験豊富なんだろう。エルメス。どこのどいつか知らんが羨ましい。あつたら一発だけでいいから重いのを叩きこんでやろう。震えるぜハート。燃え尽きるほどヒート。刻んでやるぜ！俺の血液のビート!!お袋譲りの往復ビンタ!!

「——行くぞ」

やけくそ気味にそう呟いて、俺は歩き出す。

その時、背中であつているはずの少女の手が、俺の服をきゅつと握つたような。そんな気がした。

× × ×

冷たい夢を見ていた。

ただ漠然とした何かがボクを苦しめる。そんな夢。

ボクはさらさらとした髪を伸ばしていて、少し長めの明るいスカートをはいている。

よく笑って、よく泣いた。両親が優しくかった。まだボクじゃなかった。あの頃のボクだ。

小さなボクが寒くて泣いている。そんな夢だった。

ふと、微睡みの中にパチパチという焚火の音と、パースエイダーとは違う、火薬のにおいがしない微かな煙の香りが入り込んでくる。

夢見心地だった真つ暗な視界が、徐々に現実味を帯びて引き上げようとしてくるような錯覚。

「……あ」

ゆつくりと瞼を開けると、烏色に塗りつぶされた空が視界の先に広がっていた。夜の空には水中に垂らされた塗料のように星が浮かんでいる。

視界をずらすと、まどろみの中で感じたとおりに、焚火が小さな火の粉を飛ばしながら音を立てて燃えている。

そして目の前では、一人の男性がボクの手を握っていた。

ぼんやりとした頭でボクは、「ああ、ボクはまだ夢を見ているんだ」と納得する。「俺が君を助けてやる」

ふと、男の人がへたくそな笑顔で、僕に向かってそう言った。

その言葉がなぜだかとても暖かかった。

「ありがとう」

ボクは彼の手を握り返そうと手に力を籠める。

すると、彼の瞳は驚いたように大きく開かれ、その頬が少し赤みを差した。

それをみて、またなんだか暖かな気分になった。

ボクはそつと瞳を閉じる。

最期の夢としては、エルメスも師匠も、キノも出てこなかったけど。

ボクはこの夢が見れたボク自身に少し感謝した。

始まりの話（2／3）

「お願いだ!! 入国させてくれ!!」

深夜の十時を回った頃ぐらいいだろうか。城壁の外から突然大声が響き渡った。

「だからダメですよ!! 入国は審査をしっかりと通ってからじゃないと!!」

「分かっている! それくらいは分かっているよ!! だけど、せめてこの女の子だけでも!!」

目の前の少年が、必死の形相で訴える。

その傍らには全身が傷だらけの少女が眼を閉じて横たわっていた。

これだけの大声が響いているにも関わらず、少女が眼を覚ます様子はない。

「だから、我が国の入国には本人の意思が必須だとさつきから——」

「ふざけんな!! じゃあ彼女をこの状態のまま放置しろって言いたいのか!? お前はツ!!」

「言われたって無理なんです! 無理なものはどういわれても無理です! 例外はありません

ん!!」

「だったら——せめて医者だけでも!!」

「それも無理だと言ったでしょう!! 貴方が入国しない限り、我が国の施設、人員による援

助は許可されてないんです!!」

「それでも!!っ……………お願いだ」

いつの間集まっていたのだろうか。部屋の外から見知った同僚たちが窓越しに僕と入国者たちを見ていた。その誰もが沈痛な顔を浮かべ、僕と同じ若い入国審査員の中には今にも泣きそうなるもいる。

それでも、少年の懇願に手を貸す者などいない。それがルールだからだ。

少年はついに下唇を噛み、項垂れる。その時――

「入るぞ」

一人の老人が部屋の扉を開け、中へ入ってきた。

「しよ、署長!!?」

「わるいな、少しばかりこの少年と話をさせてくれないか。大丈夫だ、入国させるつもりはない。規則通り即刻この国から出ていかせる」

署長はそう言う、近くにあった椅子にどっしりと腰を下ろす。

「さて、若者よ。突然じゃが、この国の周囲では旅人による山賊の被害が増加しておる」

「……………」

「ワシの言いたいことが分かるか?少年」

「……………つまり、俺たちが山賊の一味だって。そう言いたいのか?」

「そうじゃ」

ギリツと齒ぎしりが室内に落ちる。僕は署長を見る少年の瞳から、視線を外してしま
う。

怪我はないとはいえ、今の少年が疲労により満身創痍だということは誰が見ても明らかだ。にもかかわらず、少年のその瞳はギラギラと怒りを満たしている。

それを分かっているのかどうなのか、署長は一度大きく咳をすいた。

そして、僕の方に手をポンツと置く。

「君」

「え!? あ、はい!」

突然話題が自分に矛先が向き、僕は驚きながらもピンと背筋を伸ばす。

「少しテストをしよう。この国の入国審査の弱点はなんじゃ?」

「じゃ、弱点ですか?」

僕はチラツと旅人に視線を向け、口ごもる。言ってしまったでもいいのだろうか、と。

だが、たつたそれを考える暇もなく、たつた数瞬で、署長は「時間切れじゃ」と答えを締め切ってしまった。

「我が国の弱点は、入国審査の判断に大きなムラがあることじゃ。見知らぬ旅人の審査には厳しいが、見知った人間：身内のこととなつた途端甘くなるところがある。例えば、母国を通つて商売をするトラックだつたりの……——そうじゃつたな?」

「は、はい」

僕は署長がこれからすることを察し、口を堅く結む。

署長はそれに満足そうにうなずくと、今度は少年を見て、「おっと、そういうえばこの場には旅人がいたの」と困ったように頭を搔いた。

そして、署長が手元を持った紙を見ながら、

「そういうえば。今日はこの後我が国の商人のトラックがくるらしい」と、そんなことを独り言ちた。

そこにはこの国に来る行商人の到着時刻などがぎつしりと書き込まれている。

「さて……、若者よ。これ以上年寄りが独り言で間違いを増やさないうちに、出て行つたらどうかね。ワシらもこの後すぐに仕事があるんじや、審査条件を満たせない者は今すぐ出て行つてもらいたいの」

署長のその言葉に少年は、グツと頭を深く下げる。

そして「ありがとうございます」と礼を言つて、少女を両腕で持ち上げる。

そして去り際に。

「そういうえば、廃城に何人か男が倒れていました。まあ、だからどうということはないですけど」

その言葉に僕は、手に持った書類をすべて落とした。

「な……っ」

「それは…」

そんな彼らの後ろをあわただしく数人の入国審査員が追う。そのメンツの全員がお人よしで入国審査が甘い連中だ。

署長が手を貸したのだ。実質その行為が許可されたようなものだろう。

彼らは国を出ていく。その少し遠くからは、低いエンジンの音が聞こえてきていた。

× × ×

重い瞼を開けると、気付けばボクは病室にいた。

「ハハハは……っ」

白い天井と明るい光を発する蛍光灯が眼に入り、ボクは思わず瞳を薄める。

そして、ここが城壁の中なのではと推測した。

「あ、起きたみたいですね」

天井だけだった視界に、薄い桃色のナース服を着た女性が入った。

「あの、ハハハは……」

「ハハハは、病院ですよ。眼が覚めましたか？」

女性の口から自分の推測通りの言葉が返ってくるが、そのことにボクは眉をひそめる。

どうして？

どうして自分が病院にいるのか分からない。

なぜだかじつとしていられず、ボクは体を起こそうと筋肉に力をいれる。すると、お腹に焼けるような痛みがはしった。

「んぐ……っ!？」

それが鍵になったみたいだった。

自分の身に廃城で起こった出来事が頭の中で次々と鮮明に浮かんでいく。

胃の奥底から湧き上がる嘔吐感と、喉を焼く酸の臭い。

内臓がひき肉のように潰れるんじゃないかと思う激痛と不快感。

体内から直接脳へと響いてきた鈍い衝撃音。

自分の額がじつとりと濡れていく感覚がする。

服の下の傷跡が、ぶり返すように熱を発し始めた。

ボクは熱を発する傷跡を押えようと、手を伸ばそうとし――

――自分の手に伝わる体温に、それをぴたつと止めた。

「まだ動いちゃダメですよ！安静に、横になっていてください！」

ナースがボクの体を押さえ、ベッドへと横になるよう押し戻してくる。

ボクは従順に横になりながら、自分の視線を右手へと向ける。

そこには――

「あ……」

夢の中で出会った、あの青年がいた。

いや、違う。

「……夢じゃなかった」

彼は木製の椅子に座り、ボクのベットを枕代わりにして眠っていた。

微かに開いた口元からはすすうすと規則正しい呼吸音が聞こえてき、さらさらと柔らかな黒髪は病室の開け放たれた窓から入ってくるそよ風に、微かにゆれている。

ボクはその姿になぜか、視線が外せなくなった。

彼の手はベットの上のボクの手をゆるく握っている。

いや――それは、どちらかと言えばボクが彼の手をきつく握っているようにも見えた。

その証拠に、彼の手にはまるで強く握った後のような印がついている。

「あたたかい……」

ボクは無意識のうちに、口からそう漏らし、再びその手を握った。

「彼氏さんですか?」

「え?」

見ると、看護師が柔らかい瞳をボクへと向けている。

「……いえ。違います」

ボクがそう返すと、彼女は首をかしげた。

「でもとても親しそうに見えますよ?それに今も手……」

ボクはその言葉でハツとなる。そうだ、ボクはいつたい何を――

ボクは慌てて彼の手から自分の手を放す。

冷たい空気が、熱を持った手のひらに触れ、ぬくもりが冷えていく感覚がした。

「違ったんですか? 彼があなたを運んできたらしいんですよ。と言っても、国に入つたまではよかつたんですが、その後倒れたらしくて、ここまでは近隣の人たちに運ばれてきたんです。だから、てっきりそういう関係なのかな、と」

「ボクは彼とは初対面です」

「え!?! じゃあ彼、初対面の見知らぬ人のためにわざわざ倒れるまで歩いてきたんですか」

看護師さんが信じられないものを見るような目で彼を見る。

そしてそれは、ボクも同じ気持ちだった。

移動手段がトラックなどだと聞いたのなら、親切だと思いつながらもまだ納得できる。でも、彼は歩いてここまで来たと言った。

ボクを助けたところで報酬がでるかどうかもわからない、それに、ボクが善人であった保証もどこにもなかったはずだ。

そもそも、もし国につく前に倒れてしまったらどうするつもりだったのか。

「それに……、彼もうとつくに退院済みですよ？」

「え？」

「退院した後もこの国に滞在して、毎日アナタの病室に顔を出しています。朝早くから来ては、時間ぎりぎりになるまで、この部屋にいます。私たちが理由を聞いてもその度、苦笑いを浮かべながら『ちよっと』ってはぐらかすので……詳しいことは……」

ボクはいまさらながら彼の服装が、ボクの着させられているような患者用の服ではないことに気が付く。

「……なんで」

口からそうこぼすと、看護婦の人も困ったように「さあ……」と言った。

もしかすれば、報酬の話だろうか。

それを言わないのは、きっと病室にまで押しかけて報酬を強請るのが恥ずかしいか

ら。

べつにボクは、それをがめついだとかなんて思わない。彼はそれを望んでも当然のことをしてくれたのだから。

そうボクは納得する。……納得している。

……でもなぜだろう。

「……」

ボクはデコピンを作り、彼の額に狙いを定める。

そして、ピンツと渾身の一撃をお見舞いした。

× × ×

目の前に美少女がいる。……そう、美少女だ。

大きなお目目に、ぷにぷにほっぺ。華奢な体に小さな、お手で。柔らかな薄桃色の唇に、すらつとした鼻筋。黒目、短髪、ボーイツシュ。ぜひとも「先輩！」とその口で呼んでほしい。

そこに、数日前に見た、血液と泥と、砂埃に汚れた少女はもういなかった。

「えーっと、調子はどうか。てかもう起きて大丈夫なのか？」

「はい、危ない所を助けてくれてありがとうございます。おかげさまでもう大丈夫そうですね」

「どこがじゃ。」

「ああ、どういたしまして」

そう思ったが、俺は一応彼女に向かってペコリと頭を下げ返す。

「そうだ、自己紹介がまだだったな。俺の名前は佐藤。見ての通り人畜無害の一般人。ジヨブは大学強制中退させられたから、今はしいて言うなら放浪人、旅人。よろしく」

「ボクはキノ。同じく旅人です。普段は相棒のエルメスと一緒に旅をしています」

エルメス。その単語に、俺の頬が一瞬ピクツとなる。

「あの……?」

「え、いや、何でもないよ」

「はあ。あのそれで、報酬の話ですが」

「報酬?」

「はい。残念ながらボクは今ほとんど手持ちがありません、だから大したお金も、物も渡すことはできないと思います。なので、できれば報酬は——」

「いや、ちよつとまっけてくれ!」

俺は勝手に話を進める少女を止める。

「べつに、報酬とかそんなもの全然いらなからー!」

もし依頼などだったら俺だって報酬は遠慮なく受け取る。だが、これは自分の独断でしたことだ。言ってしまうえば、偽善活動だ。

ていうか、勝手に助けといて、一方的にじゃあ金払えとか俺は悪役か。

「違うんですか? それじゃあどうしてボクの病室に」

「え、いや。それは——」

少女の問いに、俺はさつと顔をそらす。

いやさ、だつてまさかエルメス（イケメン白馬の王子様長身手足スラー白い歯キラランスタイル、背後に咲き乱れる花畑）とやらの顔面に一撃入れるために来ていただけなんて、言えるわけじゃないじゃん。

俺の中でキノ完全美少女だという式が完成した瞬間、俺のエルメスへの嫉妬のボルテージは天元突破した。こんな可愛い娘と一緒に旅とかふざけんな。もう、アレだ。アレ。モテない俺への当てつけとしか思えない。

そもそも、手前みたいなモテる男がいるから俺に彼女が出来ねえんだ!!（暴論）マジでくたばれ!! てか、死ぬ!!（暴言）ついでだ、ほかのモテ男の首も引きちぎって、さらし首にしてやるぜアーメンツツ!!（暴走）

「……サトウさん?」

「……ああ、その。あー、それはその。キノに会いたかったからさ！」

自分で言っていて、思う。目の前の少女に、そんなへたくそな言い訳に効果があるわけねえだろ。

「はあ、そうですか」

そう思いながら彼女をみると、わっお仏頂面あ。

「あの」

「ん、なんだ？」

「一つ聞きたいことがあるんですが」

「奇遇だね！ 俺もあるよ。なんでキノはあんな依頼を受けたんだ？」

「それは——、あの依頼が達成できると思ったからです。報酬も悪くなかった」

「……ああ、それは俺も見ただから知ってるよ」

知っているとも。この国以外の報酬金額も。情報も。

そして、この少女が恐ろしいまでの手練れだということは。

「やっぱ数が多かったのか？」

俺の質問に、彼女は首を振る。

「一人だけ、異常に強い人がいました。でも、ほかの男たちは……」

と、彼女はそこまで言いかけ、一度言葉を切った。

その瞳はどこを見ているのか、せわしない。

「あの、ほかの男たちはどうなりましたか？」

「男たち……？」

その言葉を口で転がすと、彼女が俺に聞きたいことはすぐに分かった。

「ああ。大丈夫、殺したよ」

そう言うと、彼女はそつと目線を下げ、「そうですか」と答えた。

毛布の上に置かれた彼女の両手は指をきゅつと絡まされていた。

「その、エルメス君は連れて行かなかったのか？」

俺はさりげなくエルメスのことを彼女に聞く。

冗談を抜いた話、だ。

俺はエルメスに怒っていた。

この少女を独りであんな場所に行かせ、ソイツはいったい何をやっているのかと。

故人である可能性も少し考えたが、彼女の彼に対する言葉の線からいって、べつに死んでいる人間ではないのだろう。

ならば尚更だ。彼女を死地へ向かわせたその意図を。問い詰めてやりたい。その面を口汚く罵ってやりたかった。

「エルメス？」

俺の問いに彼女はきよとした表情をする。

そして――

「いても置物にしかならないと思いますけど……」

――そう言い切った。

「……あ、そ、そうか」

エルメス君の評価が思った以上に辛辣だった。俺の中でのエルメスのイメージが白馬の糞野郎から、筋肉のないもやし野郎（ただしベル薔薇風フェイス）に変わっていく。

そうか、もしかしたら。顔か。顔なのか。いや、俺落ち着け。一回落ち着こうぜ。

よく考えたら別にエルメス君が戦闘員だとは限らないじゃないか。こう、インテリタイプだったのかもしれない。

そう思いながらも、俺は口は考えと反して質問を続けていく。

「その、エルメスさんってどんな顔なんだ？人間顔じゃないっていうけど、やっぱイケメンなのか？」

俺がそう言うと、キノはますます意味が分からないという顔をした。

「顔というか、――少なくともエルメスが人間の顔に見える人はいないと思いますよ？」

――惨い。

「ダメだキノ!!人には心というものがあるんだ!!」

「そうですけど」

キノが俺にきよんとした顔を向けてくる。

ぷりていー……—じゃなく。

一体なんてことをいうんだこの娘。なんたつてそこまで言わなくてもいいじゃないか! と。もし女の子に面と向かってそんなこと言われたら、俺はもう二度と立ち直れなくなる自信がある。

俺の心に吹き荒れていたエルメスへの怒りはすっかり消え、今はエルメスへの同情心が俺の瞳を濡らした。

ああ、でもこれで分かった。

きつとエルメスは戦闘職ではなく、技術職なのだろう。そして彼は顔なんかじゃない、純粋な愛でキノの心を奪ったのだと。

キノのこの物言いも、きつとクーデレと、ツンデレを合わせたクーツンに違いない。

頭がおかしいくらい語呂が悪いし、なんて需要のなさそうなジャンルなんだ——
泣ける。

「……わるい、取り乱した」

俺はエルメスさんが例えどんな仕事であろうと、彼をこのクーツン美少女を落とすとした

男として最大限の敬意を払おう。そう心に決めた。

「それじゃあ、最後だけど、エルメスさんの仕事って——」

「こんどこそ、キノの口元が小さな「へ」を書く。その顔は何を当たり前のことを聞いているんだと言いたげだ。」

「——ボクの足代わりです。それと、上に荷物を積んだり」

世間一般では、それを奴隷という。

「……サトウさん？」

「あ、……うん……はい」

俺の中にあつた後輩系天使キノの姿が崩れていく。

あれ？ 今頃気付いたんだけど、この部屋なんか熱くない？

俺、なんか汗が止まらないんだけど。あれ、この汗目から出てる。不思議。

「エルメスさん、……そんな無理して大丈夫なのか？」

愛する女へと殉ずるその生きざま。だが、儂い。それはあまりにも儂すぎる。

俺は胸に沸いたその想いを、無意識のうちに気付けば口にしてしまった。

「へ？ いや、エルメスは走るのが好きです。乗せる重さもしつかりと注意してます。

それにエルメスは大事に乗ってくくれる人ならだれでも歓迎だつて言つてましたけど

……」

世間一般では、それをDMという。

なんだ！ 両者合意のお上でしたか！ むしろ誰でもっていう分エルメスさんは世界に合意だね！

末永くお幸せに!! あと、キノも!! お幸せに!!

ついでに、お二人さん！

ハードなプレイはほどほどにね!! お兄さんからの約束だぞ。

最後に脳内でそう締め括り——俺は、考えるのをやめた。

「佐藤さん、今からエルメスに会いますか？ボクもエルメスに言わなきゃいけないことがあるので」

おうふ。

「……」

「キノー久しぶりー!!生きててうれしいよー!!」

「ボクもよく生きてられたな、と思うよ。正直死にかけた」

「……」

「それにしても凄い怪我だねー。キノがここまで追い詰められたのなんて、『キノの旅』

史上間違いなく初めてだよ!!」

「残念ながら否定できないなあ」

「相手の人、相手手練れだったみたいだねー」

「うん、もう二度と会いたくないかな」

「……」

「そういえば、もう一つ『キノの旅』最高記録を更新したものがああるよ!」

「なんだい……、いや、分かった!一つの国での滞在日数だ」

「正解!!」

「……」

「ところでキノ」

「なんだいエルメス」

「さつきからそこで固まってるお兄ちゃんは誰さ」

「ああ、彼は——サトウさん、……サトウさん?」

「え、あ、おう……」

「どうかしましたか?」

俺は目の前に止めてあるバイクを見る。

どこからどう見ても変哲のないただの二輪車両。おかしなところなんて一つもない。

「いや、その……。すっげえバイクだなーって」

うん、そうだね。こんなもん戦場に持つて行つても置物と化すにきまつてる。バイクの顔が人間に見えるわけないよな。——と自分の中の誤解が解けていく。

てかそもそもコレ……なんよ？バイクが喋つてる。ホントなにこれ、付喪神？

そして、それと当たり前のように話しているキノ。

周りの人たちももつとみんな驚いてもいいんじゃない？いやさ、一応驚いてはいるけど、驚いてはいるみたいなんだけどさ、なんかこう……反応が少し、いや、かなり淡泊じゃない？

「彼はエルメス。ボクの相棒です」

「よろしくー!!」

「ああ……、よろしく」

——
 こんどこそ——俺は、考えるのをやめた。

× × ×

それからしばらくして、俺は設置されていたベンチに深々と座り込んで頭上を仰いでいた。

「歩き回った……」

城門へエルメスを受け入れた(？)、俺とキノは、二人で食べ歩きをして時間を過ごしていた。

なんというか、凄まじい食べっぷりだった。

怪我人だからすぐに病院へ帰らせるつもりだったんだが…。

露店に売られた食べ物を、あまりにも綺麗な目で眺めるものだから、つい一つだけ、とおごつてしまった。

「奢ろうか？」と聞いたら、「ぜひ！」と即答だった。

そして、そしてそれをおいしそうに食べることに、食べることに。

口元がゆるゆるで……頬も。ああ、あれが天使か、と俺は世界の真理の一つにたどり着いた。

おいしく食べる、君が好き。

その後、寄ったベンチでお腹を慣らしていたら、あたたかい空気も相まってか、隣から寝息の音が聞こえてきていた。

その表情はあどけなく、短い付き合いながらも見せられてきた、クールな印象は感じられない。

肩にかかる重みを堪能しつつ、エルメスと生産性のない話で時間をつぶす。

「エルメスさん、エルメスさんや」

「なんだい、サトウさん」

「娘さんを僕に下さい」

「いいよー!!」

「いいのか」

「いいよー!!」

よっしやあ! 親父さん(仮) 認定の仲だぜ!

あとは市役所まで婚姻届けをとってくるだけだね!!

「正直な話、キノが会ったばかりの人間に、ここまで気を許してるってのはすごく珍しいんだよー! 誇っていいと思う!!」

え? マジで? 何それ普通にうれしい。

「でもなエルメス、そういうことを童貞に言うんじゃない。勘違いしちゃうから」

「でも、もしボクが人間だったら、驚きすぎて天の上まで飛び上がってたよー!!」

「なるほど、心臓が止まるくらいか。ところでエルメスの心臓はどこよ」

「さあねー」

それからどのくらい時間がたっただろうか。

「おや、旅人さんではありませんか!!」

突然城門の方向から、声をかけられた。

「アナタは」

声をかけられた方向を見ると、数日前入国審査を受けた若い審査員と、老人がこつちへ歩いてきていた。

「どうも、数日前はお世話になりました。あと、先日は本当にすいませんでした」

俺はそう言って二人にそれぞれ頭を下げる。

「いやいや、礼を言うのはこちらの方だ。……こちらこそ世話になったよ！ 山賊たちを討伐してくれてありがとう。おかげでこの国の商人たちが救われるわい」

老人はそう言って「ははは」と声をあげて笑った。

「ちようど今、廃城まで出かけて、その死体の確認をしてきたところじゃ」

「え、大丈夫でしたか？ 城壁の外ですよね？」

「なあに、ワシらは一応パースエイダーが使えるように訓練されておるしな。ほれ」

そう言って老人は、着ていたコートの一部を捲る。

その下には最新式のパースエイダーがホルターに吊るされていた。

見ると、横の若者も同様にパースエイダーを腰に掛けている。

「旅人さんは、あの山賊達のことをどれくらいご存知でしたか？」

「え……と、普通に旅人や行商人を狙う山賊だと聞いていましたが。略奪、殺人。強姦。

あとは、その中に一人手練れがいて、人数は……」

「はあ、それくらい知っているのなら。十分です」

「そういえば、前々からすこし気になってたんですが、国の方は討伐隊を送らなかつたんですか?」

「討伐隊、ですか……。まあ、ええ。送らなかつた——いや、送れなかつたとしても言うのですかね」

「送れなかつた?」

その意味深な言い方に、エルメスどうしてなのか、というニュアンスで言葉を返す。

すると老人は、若い入国審査員に「さて、問題じゃ。なぜ国は討伐隊を送らなかつたのかな?」と突然話を振った。

「それは、我が国の商人が被害を受けなかつたからです。我が国では憲法によって、自身の国での内乱、または自国民たちが攻撃を受けた場合のみ、外部への武力行使が認められています」

「なるほどねー!! つまり逆を言えば自国民が被害にあわない限り、自分の国の外で起きた出来事には関わらないってわけかー!」

「なんかどつかで聞いたことあるような国つすね」

なるほど、自国民に甘いのはこの国の根本そのものからか。

「けど、それがなんで山賊に討伐隊を送れない理由になるんすか？」

昨日の様子からして、たとえば商人であつても自国の人間がいる限りこの国での扱いは厚くなっているはずだ。

——つまり。

俺の思考が答えにたどり着くのと、若い入国審査員が答えるのは同時だった。

「それは、俺たちの国の商人だけが被害を受けていないからさ」

「なる」

「なる……？」

「……なるほどの略です。それより続きを」

「あ、ああ……。あいつら何故か俺たちの国民がいる車両だけ襲わないんだ。逆に、そうじゃない車両は容赦なく襲う。だから攻撃できなかつたんだ」

「それは、さぞかし厄介だったんじゃないですか？」

「まつたくな。でももう関係ない、旅人さん達が殺してくれたからな！」

そう言つて、男は嬉しそうに笑つた。

俺はそのままチラリと老人にも目を向ける。

彼はただ静かに笑っていただけだった。

今度は、口を大きく開いてはいなかつた。

「そうだ……一応旅人さん達には謝っておかねばな。審査室では時間を取らせて悪かった。コイツは仕事にまじめでな、少し融通はきかぬが良い奴なんだ。許してやってくれないか」

「あの時は……すみませんでした」

老人と若者がそう言つて頭を下げる。それにつられて俺もあわてて頭を下げた。

「え、いや、あの時はこちらこそすいません。あの時は頭に血が上つていて———といつかあの時のことはお互いになかったことにしましょう」

「はは、そうだな。そういうことにしておいてもらえると助かる」

「はあ……僕も心残りが一つなくなりました」

なんだかぬつとりとした空気になってしまった。

それに二人も気付いたのかさっさと話題を切り替える。

「そういえば、旅人さんたちはいつ出発するんだ？」

「そうですね……、明日の朝すぐにも出ようと思つてます」

その言葉に、若い入国審査員が驚いたように声を上げた。

「え!? その女の子の怪我で出国は……」

「それよりも大事な用事があるんですよ。……なあエルメス。そうだよな」

「そうだね! 用事だから仕方がない!」

その言葉に、二人が信じられないものを見るような目を向けてくる。

「大丈夫ですよ。今もこうして出歩けてるじゃないですか。旅くらい余裕です」

俺はそれだけ言うのと立ち上がり、キノの肩を揺さぶる。

「ん……っ」

「キノおはよう。そろそろ戻った方がいい時間だよ?」

「おはようサトウさん……とエルメス」

俺はキノに肩を貸しながら、歩き出す。

「それじゃあ、キノも起きたんで俺らは帰ります。話、いい時間つぶしになりました。ありがとうございます」

「じゃあねー!」

× × ×

「それじゃ、俺はもう帰るよ」

「はい、今日はありがとうございました。エルメスもサトウさんを気に入ったみたいですよ」

ボクがそう言うと、彼は「そっか」と笑った。

日はすっかり傾いて、窓の外から差し込む夕焼けが部屋を赤く照らしている。

病院の閉館時間も残りわずかとなり、静かだった病院は、ますます静けさを深めていった。

「楽しかったです」

椅子から立ち上がったサトウさんに、ボクは小さく頭をさげた。

それに彼は再び笑って「こちらこそ」とボクに頭を下げる。

楽しかった一日が、もうすぐ終わろうとしている。

彼と一緒にいると、なぜだか唇が勝手に綻ぼうとする。

それが不思議だった。

でも、今はその逆で。

なんだか、心臓がきゅうつとして苦しい。そんな気がした。

「じゃ、またな」

彼がそう言うのと、一気に胸の中の空気が重くなった。

自分は今どんな顔をしているだろうか。

ふと、そんなことを思う。

「そうだ、キノ」

彼がボクの傍にそっと近寄る。

「プレゼント」

「え？」

彼は、突然ボクのベッドに片手を置きながら、その顔をボクの方と傾かせた。夕焼けに染まった空は赤く、灰色の雲が風に乗って薄く、薄く漂っている。眼前にある彼の顔は赤い。きつと、ボクの顔も赤いだろう。

「――」
 彼がそう言うと同時に、冷たい感触がボクの手のひらを伝わった。

彼はソレをボクの手にとつと置くと、それ以上何も言わずに病室扉を開けて出て行った。

出ていく間際、最後に見えたその両耳は――言うまでもないかもしれない。

× × ×

じきに、夜が来る

始まりの話 (3/3)

廊下の窓からのぞく電柱の柱と線が、複雑なシルエットを浮かべている。

昼間の喧騒はなく、聞こえてくるのは涼しげな鈴虫の鳴き声と、夜風が草木を揺らす音だけになっていた。

ナースステーションに駐在する看護師の仕事をする音がときどき、風に乗り小さく聞こえてくる。そんな夜だ。

人影は、看護師に見つからないよう廊下を渡り、モトラドと少女のいる病室の扉に手をかけた。

暗い部屋を照らすのは月明りだけとなって、それが部屋の構造を頼りなく浮かび上がらせていた。

備えつけられた四つのベッド。

そのなかの一つが白いカーテンで囲まれている。その白は、暗闇の黒の中でひととき映えていた。

人影はその白い布カーテンの前にそっと近づく。

そして、カーテンを開くことなく――

——発砲した。

小さな風音速の風が室内を舞う。

サブレッサー抑制器によって音を減らした銃弾が白い布に穴をあけていく。

地面に落ちた薬莢が、硬質な音を何度も室内に落とした。

銃弾を撃ち込まれるたび、カーテンが揺れる。

やがて、銃声が止んだころには、カーテンは穴だらけになり、その際に見えるベッドもそうになっていた。

男はゆっくりとパースエイダーをおろし、ベッドから背中を向ける。

「動かないでください」

そして、自分にパースエイダーを突きつける少女の姿を見た。

人影はその姿を見て、ひどく動揺したようだった。「ひっ」と短く喉を鳴らし、一歩後退する。

だが、

「キノが言う通り、動かないことを推奨するよ」

今度はその後頭部から声を聞くこととなった。

「な……なんで」

「それは、キノが死んでないのか。それとも、なんで俺がいるのか分からないってことか

? 入国審査員さん。いや——十五人目の山賊さん

俺はパースエイダーを構えながら、若い入国審査員にそう言った。

× × ×

赤く染まる部屋の中、彼は言った。

「——今夜、誰かがキノを殺しに来るかもしれない」

「え？」

「いったいどういう——。」

そうボクが聞くより早く、彼はボクの手に冷たい塊を乗せる。

ボクはその重量に、その感触に。それが何であるのかを悟る。

それは、間違えるはずもない。ボクが廃城に置いてきた『パースエイダー』の感触だった。

× × ×

「一部始終見せてもらってたよ。見事に騙されてたみたいで」

俺はパースエイダーの銃口を男に向けながら、挑発するように言う。

答え合わせの時間だ。

「なんで……ッ」

「そのなんでは一体どちらの意味かな？なんで自分が山賊だとばれたか？それともなんで襲撃が分かったか？そもそもなんで俺が15人目だと？じゃなければこんな室内のどこに隠れていたかか？」

俺は銃口を外さず、吐き捨てるように言う。

「時間はたつぷりあるから、ひとつづつ答え合わせしてやるよ。俺たちが隠れていたのは他のベッドの下だ。一つだけカーテンの締められたベッドを見りゃ、当然そこに人がいると思うよな。それに、暗い視界の中で白は見つけやすい目印だ。状況から示し合せ、そこを狙うだろう」

「次に、なぜ俺が十五人目がいるか分かったのか。それも簡単、俺が依頼の話を受けたのがこの国じゃないからだ」

俺は依然として呆然とした顔を晒す男に言う。

「その国の情報によれば、山賊は全部で15。廃城を拠点にしてるってことになってた。でもいざ廃城に行つて数えてみれば人数は全部で14人しかいない」

全員が等しく死亡していた。だが人数が合わなかった。

「最後の一人の死体、居場所だけがどうしても分からなかった。もしかしたら山賊の情

報に間違いがあったんじゃないとも考えたんだけど。まあ、それは諸事情があつて深くできなかつた」

傷だらけの少年——いや、少女キソがいたから。

「それで、この国に来てみれば……あら不思議。山賊の数は14人らしい。じゃあやっぱりアツチの国の情報が間違つていたのか。そう思つた」

「思つてただけだな……、その後アンタの口から面白い話が出た。『なぜかこの国の人間だけが襲われない』つてな」

よくもまあ白々しいことを言えたものだ。

正直、十五人目がこの男だと分かつた瞬間は、正直驚いた。

まさか俺にあの情報を与えてきた本人が、犯人だとは誰も思わないだろう。

「俺は、山賊がこの国の人間の乗ったトラックを襲わないように、トラックの来る日程を漏洩ながしてる人間がいると思つた」

いつの日かの入国審査室。老人が見ていた書類を思い出す。トラックの到着時間を知らせる表を。

「まあ、とにかくその情報を流してる人間が、滞在中に襲つてこない確証はない——
……だから復讐できる時間を絞り込んだつて感じて……まあ、つまりは明日出発つてい
うのは嘘だ。すみませんね」

「それじゃあいつから俺だと……」

「ああ、ぶつちやけそこは今この瞬間知ったって感じで。俺の予想は所長さん辺りだったんだけどな」

そこまで言うとう男は小さく震えながら、顔を覆う。

「畜生……」

「とまあ、そういうわけで……終わりだ」

男は顔を打つ向かせたまま「畜生」とつぶやき続ける。

「お前らのせいだ……。お前らが殺した」

「てことは、やっぱり俺たちが仲間を殺した復讐か」

「ああそうだ!!復讐だ!!」

男がこぼした理由はあまりにも予想通りのもので、俺はつい眉を顰める。

だが次の瞬間、男は下を向いていた顔を勢いよく上げ――

「お前らが署長を殺した――その復讐だ!!」

――そう叫んだ。

「はっ。」

こんどは、俺たちが間抜け面を晒す番だった。

男の叫びは終わらない。

「署長、あの人、あの野郎、あの糞は僕が山賊の仲間だつて、僕を警察に突き出そうとしやがったんだ!!畜生!糞が、糞が!!僕がどれだけこの仕事を大事にしたのかあの野郎分かっていないんだよ!!」

豹変したかのように唾を飛ばしながら叫ぶその姿は、とてもじゃないがつい前に会つた人物と同一人物とは思えなかつた。

「僕がどれだけ一生懸命働いたのか!!それを、たかだかあの程度のことです:アイツはきつと頭がおかしいんだ!!他の奴らも盗み聞きなんかしやがつて!!人間のすることじゃねえ!屑のすることだ!!人が下手に出れば偉そうにしやがつて!!なにが優しさだ!!何が恩恵だ!!僕を刑務所に入れようとしたくせに!!これだから頭の悪い連中は嫌なんだよ!!自分が年上なだけで偉そうにしやがつて!!わざわざ俺が話を聞いて、命令を聞いてやつてるんだぞ!!それだけで十分だろ!!もつと俺に感謝しろよ!!年下の連中もだ。俺は年上なんだぞ!!偉そうにすんじやねえよ!年上を、俺をもつと敬えよ!!だから嫌なんだよ!自分より馬鹿な連中と一緒にいるのは!!あいつらはみんなみんな脳みそが腐つてやがる!!正しい行動が何も理解できてない!!お前らもだよ!お前らも頭がおかしいんだ!!署長を殺しやがつて!!お前らがいたから署長は死んだんだ!お前らのせいで俺は署長を殺さなくちゃいけなくなつた!お前らがこの国に來たせいで、依頼を成功させたせいで!!おかしいだろ!!理不尽だろ!俺に人殺しをさせるだなんて!!なんで

俺に殺人なんかさせやがった！この悪魔め！死神め！！仲間を、仲間たちを返せ！署長を返せ！！そして俺に殺人をさせたことを謝れ！！償え！！そもそもなんで死んでないんだよ！！俺がベッドにわざわざ銃を使ってまで撃つたんだぞ！！？なんでベッドに寝てないんだよ！！なんで死んでないんだ！おかしい、おかしいじゃないか！お前は俺がわざわざパースイダーを使ってまでした行いを無駄にしたんだぞ！！この部屋に来るまでどれだけ苦労したと思ってる！！無駄な苦労を俺に掛けさせやがって！！これだから旅人は嫌いなんだよ！！廃城の野郎どもも、人の手を頼って他人の残飯を食うだけの動物のくせに偉そうに俺に指図しやがって！！その癖旅人ごときに殺されやがった！！何のために俺が行商人のトラツクの荷台に紛れ込んだと思ってるんだ！！この連中を信頼させるのにどれだけ時間を使ったと思ってる！！どれだけ苦労したと思ってるんだ！！糞が、糞が！！役立たずが！！あの役立たず共が！！俺の苦労が！！信頼が！！全部水の泡じゃねえか！！」

あまりにも無茶苦茶な理論。それをあたかも正しいかのように垂れ流すその瞳は狂気に染まっている。後半からは、耳に入れることさえ苦痛だった。

そして何より。

「……殺したのか」

その言葉に男は鼻を鳴らし、再び口を大きく開く。

「そうだ！！さつきから何度もそう言ってるだろうがッ！！同じことを何度も言わせるん

突然再起動した男が、キノに手を振りかざした。その手には鉄製のパースエイダーが握られている。それは弾がこもっていないなくとも、一つの凶器だった。

だが——男よりキノの動きの方が早かった。

早業——そう呼ぶしかない。彼女は男に向かってパースエイダーを構える。

そして——

「糞が!!糞が!!殺してやる!!ぶつ殺してやる!!」

「つ!!」

——その手から銃を滑り落とした。

キノの双眼が大きく見開く。

だが、その瞳の先が捉えているものは落ちたパースエイダーではなく、目の前の男の姿。

「キノ!?!」

見たことのない顔だった。

彼女は唇を小さくゆがませ、顔は血の気を失い、眉尻を引き合わせている。

自分に向かって振りかざされる凶器——、いや、腕を見る彼女の表情は、恐怖で固まっていた。

幸か不幸か。キノが体制を後ろへ倒し、地面に尻餅をつく。

そしてその頭上スレスレを、男の凶器が通過した。

「ツクそ!!」

俺はすかさず男の腕を狙い、パススイダーを発砲する。

——殺人は駄目だ。面倒なことになる。

そう思いながら放った弾丸は、希望通り男の腕へ収まり、鮮血を散らした。

「お、おおお——あ、あああああああああああああああああああ
あツツ!!!」

だが、男の動きは止まらない。

彼は手に持っていたパススイダーを俺に向かって思いっきり投げ捨ててくる。

そして、自分の腰に手を当てたかと思うと、そこから新たなパススイダーを引き抜いた。

俺はそれが署長のパススイダーだと直感で悟る。だが今それを知ったところで、何の利点にもならない。

「こ、ろずううううううううあ、あああああああああツツツ!!!」

男は絶叫とも言葉ともとれる声を喉から発し、その銃口をキノへと向ける。

「……くツ!」

それを見届けるよりも早く、俺は駆け出す。

「キノ!!」

俺は覆いかぶさるよう、彼女を抱きしめる。

男に向かつて背中を向けたため、俺の視界には必然的にキノが映ることとなる。

こんな状況にもかかわらず、俺は「あれ？俺なんであつたばかりの女の子に、こんな命張つてんだろ…」とそんなことを思った。それと同時に「あ、キノつてすごい、いい匂いがする」とも。

そしてそれらが、これから自分の身に起こる事柄への現実逃避であることも、頭のことかで理解していた。

発砲音。

火薬が焼ける臭い。ハンマーを叩く音。

——肉に穴が空く。

一秒未満後にやってきた激痛に、俺は唇を噛み、暴れ狂う痛覚と喉から溢れ出す絶叫を殺す。

キノを抱きしめる腕に力が籠り、キノの口から呼吸が漏れた。

激痛は続く。

抑制機器の音が鼓膜を伝い、何度も何度も脳内に響き渡る。

そしてその音は、パースエイダーの音が止まった後も、なぜか頭の中で反響し続ける。「サトウ……さん？サトウさん？……」——サトウさん!!」

それを、キノの声为上書きした。

「あ……」——「はは」

その表情はあまりにも悲痛で、悲惨で、絶望の淵を見ているような、酷いもので。

自分という存在が今キノの心を傷付けているのだということに、加虐心にも似た歪な悦びが胸の中を満たす。

——「やばい、——嬉しい。」

唇が独りでに吊り上がる。

自分のせいで傷付いている女の子見て笑うだなんて。嬉しいだなんて。俺はおかしい。あの男の言ったとおりだ。もういつそ死んでしまった方がよっぽど彼女のためになるかもしれない。

キノを抱きしめる腕から力が抜けていく。

垂直に回転する世界。そして、衝撃。

焼けるような熱を持った体に、冷たい床の温度が気持ちよかった。

少女の呼び声と、男の怒声。その他にも多くのざわめきが俺の耳へと飛び込んでくる。

そりや、これだけ騒いだら、人くらい集まるか…。

あ、そういうえばキノつて怪我人だったつけ…。

体痛くねえかな？悪いことしたな。

…。

足元から地面がなくなっていくような錯覚が脳を浸し、黒い世界が近付いてくる。

薄れゆく意識の中。

その中で、俺は少女の声と、もう聞こえるはずのない銃声を聞いた気がした。

× × ×

薄い薬品の臭いが鼻腔を抜ける。

お腹にかかる重みに眼を明けると、キノが椅子に座りながらこちらを見ていた。

そして、偶然にも目が合う。

あー、美少女はいつものジト目でもおつきく目を開いても可愛いんだなあ。さすが美

少女。略してさすびしよ。

しかしおかしい。俺は死んだはずでは無かったのか。

あれだけあの男の黒いアレでパンパン（緩和表現）されたんだ。普通死んでるだろう。つまりこれは。

「夢だな」

なるほど、夢か。

……夢かあ。

そうだよなあ。夢に決まってるわなあ。

起きたら目の前に女の子がいたとかギャルゲの世界の出来事だもんなあ。現実でそんなこと起きるわけないもんなあ。恋人もできず、童貞のまま死んだせいでこんな夢を見ているのだろうなあ。拗らせてんなあ、俺。なに分析してんだろうなあ、俺。クソが。

「あの……、……サトウさん？」

いや、逆に考えるんだ。夢だからいいさ、と。

夢の中なら現実で出来なかつたようなあんなことやこんな事が出来るのではなからうか。

例えばキノを撫で回すとか、キノの全身を弄るとか、キノの全身を舐め回すとか。

……。

……オラっすっつげワクワクしてきたぞ。

「……サトウ、さん？」

ああ、今分かった。これは神様から与えられた最後の慈悲なんだ。恋人もできず、清い身のまま散っていった俺への施しなんだ。

よし、そうと決まれば……行くしかないだろ新たなフロンティアに。

俺は目を見開いた。俺はもう迷わない。

どうせ死んだんだ。こうなりやとことんいつてやる。

俺は腹筋のバネを使い起き上がった。

そしてキノへと手を伸ばさー

「せねえでやんの!? いっづえええ!!?」

「さ、サトウさん!」

なんだ!? 身体が超痛え!?

おいふざけんな世界。なんだ? 未成年に手を出そうとしたのがダメだったのか? ほんとふざけんな、未成年に手出すって言っても夢の中でだぞ!? ポルノ敵しすぎやしねえか!?

「まだ動いちやダメです! 手術したばかりなんですから!!」

キノが慌てた様子で、俺を手で制しようとしてくる。

つて……キノ、今なんて言った?

「手、術? ……あれ? ……もしかして俺生きてる?」

俺のマヌケな問いに、キノは一瞬はっと息を呑んだ。

そして、厳かに瞼を閉じて、言葉一つ一つを確かめるように

「……ちゃんと、…生きてますよ」

そう口にした。

「……そう、か」

そうか。生きていたのか。俺は。

「…調子はどうですか？」

「いや、大丈夫。とはお世辞にもいえない…」

「…ですよね」

正直、今生きていることすら信じられない。

なんだったたら、今この瞬間背中から天使の羽的な何かを生やしたサムシングがドツキのプラカード持って天井突き破ってネタバラシしてきても驚かないぞ俺は。

しかし、どれだけ待っていてもプラカードを持ったクソ天使が現れる気配はない。

「え…と、キノ。一ついいか？」

「…はい。何ですかサトウさん」

「あの後どうなった？」

その言葉に、キノは小さくうなずく。

「あの後、男は病院に運ばれました」

「ん？」

開口一番俺の予想と違う。そして、わずかな違和感。

俺はキノを一度じつと見る。だが、その表情からは何も読み取ることが出来ず、俺は気のせいかと疑念を消した。

「病院？つて、アイツ——ああ、だったな俺が撃つた怪我か」

「……それもですがその後僕もパスエイダーを撃ちました。しばらくは警察病院に入られるらしいです。人を殺した罪と、情報を国外に漏洩した罪、犯罪に加担した罪……その他色々。病院を出たら、少なくともこれから一生檻の中、だそうです」

その言葉に、俺はざまあみろと鼻を鳴らす。

アイツに同情するような優しさは、最初から俺には持ち得ていない。

キノを撃とうとしたんだ。これから長い余生を豚箱で過ごせばいい——本当にいい気味だ。

「サトウさんの怪我は全治に時間がかかるそうですが、命に別状はないそうです。『まるで弾が大事な器官、血管を自分の意思で避けたかのようだ』つて、お医者さんたちは言っていました。最後に、佐藤さんが撃たれてから二日たっています」

二日つて……。いや、そこはさして重要じゃない。それよりも重要なのは……。

「はは……すっげえ奇跡だな」

実際、自分でも死んだと思っただが。

あの激痛と、血液がなくなっていく感覚は今でも鮮明に思い出せるし、今でも自分が生きているのが夢なのではないかとさえ思う。

「あとは、依頼の達成ということで報酬金がでます」

「報酬金……金か。夢が広がるなあ！」

「……はい」

「なあキノ！もし俺が治ったら一緒に飯行こう。良かったらたくさん奢ってやるよ！」

「……はい」

その返答に、さすがの俺も違和感を感じる。

エルメス曰く、『ただで美味しいものを食べるのが一番好き』のキノがこの話題につられないだなんて。

だが俺はそれをあえて無視して話し続ける。

「何が食いたい？この国って牛肉の他に、あとサボラ……？とかなんかそういうウナギみたいなやつ料理が有名らしいぜ。少し高いらしいけど、せっかくだから食いにいこうぜ！」

「……そうですね」

「あれ、もしかして俺が寝てた間に食べちゃったか？」

「いえ……」

微かに、キノが前髪を垂らす。

そのせいで顔面に影が差し、表情が一層分かりずらくなる。

「そっか、じゃあそこで決まりだな。あー、でもそろそろ足も欲しいと思つてたんだよね。バイク……じゃなくてモトロード？ だっけ。それも欲しいな。だとすれば、お金は多めに残しておいた方がいいか」

「そうですね……」

「でも、ホントありがとうキノ。」

「……、なにがですか」

「俺が今もこうして生きてるのは、キノが助けてくれたおかげだ——」
「ありがとう。そう俺は続けようと口を動かす。」

「——なにが……」

だが、

「ん？」

「……なにがボクのおかけなんですか？」

冷え切った声と共に、その先を遮られた。

「……っキノ？」

「サトウさんは——」

彼女が頭を上げる。

「——……アナタは、ボクのせいで撃たれたんですよ」

その声には深い疑念が含まれていた。

「いや、あれはべつにキノが悪いってわけじゃ——」

「ボクがあの時撃つていけば、アナタが撃たれることはなかった」

まるで事実を淡々と述べるような、自らを糾弾するような物言いに、俺は一瞬息を詰まらせる。

「あなたはボクを批難するべきはずですよ」

「それは——」

「ボクは。ボクはあの時、手が震えて動かなくなりました。男の表情と、振り下ろされる腕と、叫び声が……廃城の男たちと重なりました」

あの瞬間、あの男の姿が彼女の目にはなにに映っていたのか。

「もしあの時、ボクが撃てていけば……アナタが撃たれることはなかった」

キノはそう繰り返す。

自責の念にでも駆られているのか、膝の上に置かれた小さな手をぎゅうと握っていた。

「なあ、キノ」

「はい」

「キノはさ、痛みに慣れてないんだな」

俺の言葉にキノが眼を見開き、言葉を絞り出そうとする。そして、少し押し黙った後に、「そうですね」と小さくこぼした。

「今まで旅で、痛い思いをしたことなんかほとんどありませんでした。そうなる前に、終わらせられてきたので」

その返答に「やつぱりな」と俺は笑う。

「キノがパースエイダーで男に狙いを定めたときさ、天才かよつて思ってたんだよ。それくらい、速かった。……それだけの実力者が、そんじよそこの依頼ごときに後れを取るはずがねえよな」

つまるところ言えば、キノは痛い思いをせずに依頼をかたづけてきたのだ。

だから、痛みに対する耐性が低い。

長い間外に出ることなく、研ぎ澄まされてきた鋭利な痛覚。いや、普通痛覚というものはそういうものであるはずなので、彼女は何もおかしくない。

むしろこのくらいの少女が痛みというものに慣れていたら、それはそれで大問題だろう。

「痛かっただろうな」

俺はそう言って、彼女の姿を見る。

顔に張られたガーゼ。痛々しい切れ痕の残る唇。包帯の巻かれた首元。腕。指。足首。

衣服で隠れているが、その下も傷だらけだ。

「……そうですね」

「痛いのは怖いよな」

彼女は微かに目を伏せた。その視界の先が、なにを捉えているのか分からなくなる。

「でも、キノは自分で立ち上がった。俺を、救ってくれた」

「……でもそれは」

もしキノがいなければ、俺はあの後鈍器で殴られるやなんやらで、満身創痍通り越してきつと死んでただろう。

実際、あの男ならば容赦なくそれをしただろうと謎めいた確信があった。

「それは、なんだ？もし俺がキノと同じ目にあつてたら、俺たぶんもう二度とパースエィダー握れなくなるぜ。だから……すげえよ、キノは」

「アナタは撃たれた。それはボクのせいだ——」

「それに、年上つてのは下にかっこいいところ見せたがる生き物なの。女の子を身を挺してかばって、救って、そして見事に生還した俺。超かっこいいだろ。って、あー、だからさ……そんな思い悩むな」

俺の言葉に、今度こそキノは押し黙った。

そして俺も、言葉を吐き出すうちに、その言葉をいったい誰に向けて放っているのか分からなくなってくる。

だから、最後に頭の中を全部リセットして、いま伝えたい言葉だけを選ぶ。

「ありがとう、キノ」

——俺は今笑えているだろうか。

どうにも、作り笑いというモノが苦手だ。

俺は今……ちゃんと笑えているだろうか。

そんな一抹の不安を胸に、薄く細めた視界の中で彼女を見ていた。

だが、そんな不安などあつという間に頭から消えた。

キノが笑った。

「いえ、それをいうのはボクの方です。ありがとうございます——サトウさん」

頬を緩ませ、微笑をつくった。

「……………」

誰が言ったか。

『普段無表情の女の子が、ふとした瞬間に見せる笑顔の破壊力はヤバイ』

今ならその意味が分かる。

「サトウさん……………」

「え?…あ、なんだ?」

「その、手を出して下さい」

俺は彼女の言葉に首を捻りつつ、手を出す。

すると、その上にキノが手を重ねてきた。

「……………?!?な」

心臓の鼓動が一気に早くなる。

そんな俺の内心を知ってか知らないでか、

「暖かい」

キノはそう一言零した。

その表情は、今まで見た中で一番魅力的だった。

女の子って汚い。なんでこう一つ一つの言動が心揺さぶってくるのか。たった一つ

の微笑みでこんなにも心揺らしてくるのか。

俺はサツと自分の頭を下げ、片腕で乱雑に顔を隠す。

「ちよ、ちよつと……サトウさん!? もしかして傷が……」

包まれた手の暖かさが遠くなり、キノが何か言ってるようだが気にしない。

やばい、あつちい。

顔あつちい。

今自分の顔がどうなっているのかは考えるまでもない。

とりあえず、今絶対顔上げられないわ。

結局、俺が長時間顔を上げなかったせいで、キノが看護師を呼び、病院にいろいろと迷惑をかけることとなったのだが……そこは詳しくは必要ないだろう。

× × ×

俺はバイク……じゃなかった。モトラドを引きながら一人で城門を出る。

「外の空気が美味え……!!」

出る前、国の中で入国審査員の人たちが何度も頭を下げてきたりとアクセシデントはあったが、無事五体満足で出国できたことに、妙なすがすがしさが胸をいっぱいにする。

男との銃撃事件があつてから、三十日……ひと月以上が過ぎた。

入った報酬金でバイ……モトラドを購入し、鈍っていた体を元に戻すのに思った以上に時間もかかった。その他諸々入国してから違いがあるが。

そうだな……何よりの違いは。

「お待たせしました」

鈴を転がすような心地良い声が、鼓膜を揺らす。

「お、キノもお疲れー」

一台のモトラドを押し、城門をくぐって出国する黒髪の少女。

「疲れることはまだなにもしてないと思うんですが」

「右に同じー!」

呆れたようにいうその声。だが彼女の表情はどこか柔らかいようにも見えた。

……相も変わらない仏頂面なので、もしかすれば本当に見えただけかもしれない。

俺はそんな声を気にせず、空を眺める。

「絶好の旅日和だな」

城壁のない、地平線まで見渡せるような道と、澄み切った空がどこまでも、どこまでも続いている。

風は涼しく。

地を照らす陽光は暖かい。

小さな花卉が、ふと吹いたそよ風に乗って、どこまでも飛んでいく。

「なあ、キノ。次はどここの国に行くんだ？」

俺の言葉に、キノは答える。

映画館の国 (1/1)

男がいた。

薄暗い室内。俺たちの視線の先で、何発目かもわからない銃弾をその身に浴びた男。彼はその喉を震わしながら立ち上がる。

「なかなか死なねえな…」

「もう十発は撃たれてますけどね…」

その姿を、俺とキノは雑談をしながら眺めていた。

男は全身から血液を撒き散らし、その瞳に偽りの憎悪を浮かべながらパースエイダーを構える。

そして、ふらつく体を押さえつけるようにしながら、銃口を俺たちへと向けた。

だが、

「あ、死んだ」

先に鮮血が飛び散った。

その出どころは男からだった。

眉間に空いた穴からはダラダラとどす黒い血液が垂れていた。

やがて男の体はぐらりと揺れ、糸が切れた人形のようにゆっくりと地面に倒れた。男は立ち上がらない。

「それじゃ行くこうか。キノ」

「そうですね」

男の姿が消える。

俺たちは席を立ち、暗い通路の段差に注意しながら出口へと歩く。

その背後では白い文字列がゆっくりと流れているのを横目に見ながら、扉を押す。

「…キノ」

扉の隙間から漏れ出す光に軽く目を窄めながら、俺はキノの方へ向く。

「口元に食べカスついてる」

暗い空間。大きなスクリーンに、敵だった人物と仲良さげに肩を組む男のが流れていた。

× × ×

「んっはーっ！」と良く分からない声を出しながら、俺は固くなった体をグイグイと伸ばす。

俺の斜め上には、大きな画像の張られた一枚板が天井からつられており、そこでパースエイダー片手のむき苦しいおっさんが、血を流しながらかつちよいいポーズを決めていた。

「映画、というのも久しぶりに見ました」

空になった箱を片手にキノが言う。

古城を抜け、草原を抜け、草原を抜け、さらに草原を抜けること約四日。

映画が有名だと自慢げに話す入国審査員の話聞き流すこと数十分間。

俺とキノは三日間滞在するという事で入国手続きを済ませ入国した。

流石映画の国だと自称するだけあって、あちらこちらに映画館が立ち並んでおり、また値段もお手軽だった。

ちなみにさつきまで見ていた映画は、ハードボイルド臭剥き出しのむさいおっさんがこれまたむさいおっさんとどつたんばつたんくんずほくれつ大騒ぎする内容だ。すごーい！君はドンパチ出来るタイプのフレンズなんだね！

俺的には結構おもしろかったんだが……特につてか主に序盤でおっさんが親指立てながら溶解炉に沈んでいくシーンが。

まあ、でも創作物に感じるものは十人十色なもので。

「以前エルメスと二人で見た時もあったんですが……ボクには六発のパースエイダーか

ら何十発も弾が出る意味が分かりません」

「それは演出だから…」

どうやらキノには合わなかったようだ。

実際の撃ち合いを体験してるせいか、それとも少し天然なせいなのか。…多分どっちもだな。

俺は苦笑いしながら、映画館のホールを歩く。

周囲にはバイオレンスから恋愛ものまで、多種多様な映画のチラシとポスターが張られている。

「それじゃ、次何見るか決めようぜ」

「…そうですね」

俺の言葉にキノがぼちぼちとあたりを歩く。

そして、しばらくすると一つのポスターの前で立ち止まった。

「コレなんてどうですか」

「恋愛もの…か」

ポスターには二人の男女が手をつないでいる背中が写っている。

…なんか意外だ。キノのことだから、なんだかんだ言ってまたドンパチものを選ぶものかと思ってた。やっぱりキノも女の子ってことか。ふふ。

「キノって恋愛映画とか見たことあんのか？」

「一応ホテルで何度か。といつても流し見程度ですけど」

確かにいろんな国を回っているんだっただら見る機会もあるか。

しかしまた、じっくりと見たわけではない、という部分にキノらしさを感じる。

俺はそんなことを思いながら、ひとりで「くくつ」と笑う。

「なんですか」

「あー…いや、なんでもない」

冷めた瞳を向けてくるキノに、俺はぶんぶんと手を振る。

とりあえず今日合わせ三日間…：ゆっくりできそうだ。

× × ×

俺たちがシアタールームの席に座ったのは、ちょうど開演と同時だった。

映画が始まった。

暴行されそうになっていた少女を、青年が…チツそりやイケメンか…が助けるところから物語は始まる。

そのことがきっかけで名前も知らない青年に少女は不思議な何かを抱く。ただ、少女は自分のその気持ちが一休何なのか気付いていないようだった。…完全に恋ですね。

一方の青年は少女に一目ぼれし……ってあれ？もうなんか両名このまま結婚しちゃえよーって雰囲気になってない？もう終わりでいいんじゃない？あと一時間二十分くらいあるけどもういいだろ。

てか何なの？なんで映画の主人公は顔面偏差値が高い奴しかいないの？イケメンじゃないと恋愛なんてできないの？こちとら遊びでクソみてえな面してるわけじゃねえんだよ！！

と、自分から選んだにも関わらず、開始十分で映画にケチ着けるカス野郎事俺だが。

「……？」

ここで隣からポップコーンを食べる音が聞こえてこないことに気付いた。

キノ？

そつと隣を見ると、スクリーンのぼんやりとした光に照らされたキノの横顔が目に入る。

興味深いものを見るような、そんな表情でまっすぐスクリーンを見つめている。

意外だ……。

「……」

俺は顔をスクリーンへと戻す。

ここにくるまでの道中何度思ったか。

俺はキノのことをよく知らない。

まだ出会って日も浅いのだから当然なのだとも思うが、それにしても知らない。

キノは今まで自分が訪れた国の話はすれど、自分自身の話はあまりしないから。

俺がキノについて知っているのは、せいぜいパースエイダーの扱いが上手くて、シャワーが好きで、食べることが好きってことくらいだろう。

年齢も。どこから来たかも。なんで旅を続けているのかも、なんで旅に出たのかも、俺は知らない。

ふとそんなことを思った。

× × ×

映画内容も終わりに近づいてきた。

青年は第三者の手によって海に沈められてしまう。少女と彼らの友人たちは青年を助け出したが、青年は息をしていなかった。

少女は青年を助けようと彼の唇に自分の唇を合わせ、必死で息を吹き込んだ。

少女は気付いた。自分のこの気持ちは何なのか。

やがて、少女の思いが届いたのか青年は息を吹き返す。

そこからも二人は大きい波や小さい波に戸惑い、ぶつかりながら互いのことを深く知り合っていく。

俺はいつしか前半の感想など忘れ、のめりこむように見ていた。

そして映画が終わる。

「綺麗にまとまっていたな」

作中転がっていた不穏なフラグをすべて回収したうえでご丁寧にへし折ってからの完膚無きまでのハッピーエンドだった。

「そうですね。ああいった映画は初めて見ましたけど……結構面白かったです」

あまり中身の減っていないポップコーンの箱を持ちながらキノが言う。

ホントよく集中してたな。

……いや、普通はキノくらいの少年少女ならば普通あんな風の世界にいる物ではないのだろうか。

「どうかしましたか」

いきなり黙り込んだ俺に違和感を感じたのか、キノが首をかしげる。

「あーいや、意外とキノってああいう内容のものに興味あるんだーって思って。あの映画みたいな経験あったりするのかな？」

「いえ、自分で体験したことはない……あまりないですけど」

「まあ、確かにあんな甘酸っぱいのは現実ではそうそ……うえ?」

「さて、今なんて言った? 『あまりない?』それって逆を言えば少しはあるってことじゃ

俺はバツとキノを見る。

「もしや……いや、もしかしてあるのか?」

「はい?」

「いや、あの映画みたいな経験……ッ」

俺の問いにキノはさも当たり前といった風な表情で……つまり普段と同じ表情で。

「……ありますけど」

そう答えた。

「……そ、そうか」

うあああああ! 何故だかはよく分からないけどショックを受けている自分がいるッ。

いや待て、そもそもどの辺り!? あの映画のどの辺らへんの経験なの!? 男の子と手をつないでたシーンか、それとも抱き合ってたシーンか、それともキスシーンか!? お父さんそんなの認めませんよ!!

キノがそんな俺の大荒れの内心を知る由もなく、彼女は思い出すように虚空を見つめて口を開く。

「でも……………最近だったらサトウさんですね」

「——え？」

意外にもキノの口から出たのは俺の名前で、俺はぽかんと口を開けてしまった。

「…俺？」

そんな俺の様子を見て、キノがほんの少し唇を緩める。

「助けてくれたじゃないですか、ボクをあつた廃城で」

「……………ああ、あれか」

俺の脳内に浮かび上がるのは血だらけのキノの姿。

…俺の予想していたロマンチックより、数万倍血なまぐせえ。

まるで白馬の王子様のように颯爽と現れた映画の青年とは違って、俺が見つけた時にはキノは既にボコボコの重態で完全に意識を失ってたし、正々堂々と悪党に立ち向かった青年とは違って、俺は悪党どもを不意打ちで撃ち殺していったわけで……。似て非なるものどころかかすりもしないと思う。

でもその答えにどこか安心したのも確かだ。

「……………あー、てつきりキスとかそういうのだと」

「ないですね」

「そっかー！」

ああ、なんか安心。

「はい。ところで、サトウさんはどうなんですか？」

一瞬にして俺の時間が止まった。

「…サトウさ——「聞くな」……………」

聞くな。もうホント聞くな。聞かないでくれ。

この年になるまで女性相手に恋愛できたことが一度もないなんてこと全然ないから。バレンタインで貰ったチョコが母親からだけだったり、靴箱に入ってたラブレターを空けたら呪いの言葉だったりとか全然ないから。ないっつてんだろ!!お前ら俺をいじめて楽しいのかゴラあッ!!

「…あの、大丈夫ですか？」

キノの優しさが染みる。

「いや、ホント大丈夫だから……うん、俺は大丈夫。俺は大丈夫…大丈夫」

そう俺は自分に言い聞かせたのち、深い溜息を吐きだす。

「一応好きな人はいたんだけどな」

「…え」

「え？まって、その『え』ってなに？」

「いえ…好きな人いたんですね」

キノが少し言葉を区切りながら言う。やめて。噛み締めるように言わないで!?!なん
でそんな言い方するの!?! Why!?!

「今だから笑い話にできるけどな……その人女装した男だったんだよ」

いえ、正直な話今だ俺の心を深くむしばんでいます。

「男が女装する国でさ……目ぼれだったんだけどそれを知らなくて。告白したらokし
てもらって、意気揚々としてたら……」

あ、泣きそう。俺は年下の女の子に一体何を言っているんだろう。

「……そうですか」

そうだよお!!

いや、別にいいんだ。俺の黒歴史が話題の種になるのなら。心の傷の一つや二つくら
い大した問題じゃない。むしろ俺は喜んで自分の傷を晒そう。

……だからな、キノ。その微妙そうな何とも言えない顔が一番傷つくんやで。

もうこれ以上ダメージを食らうと心の闇の浸食が過ぎてそろそろダークサイドへ落
ちそうになってきたから、この話はもう打ち切ろう。

「……ああ、キノ……そろそろお昼にしない?」

エルメス曰く脳と胃袋で物事を考えるキノにこの言葉は効果てきめんだったようや。

いや、冗談。空気読んでくれたんだよね。

「そうですね、そろそろいい時間ですし。そういうえばここに来る途中で美味しい匂いするピザ屋があったんですけど、今日の昼食はそこにしましょう」

滲みきって歪んだ視界を拭い、俺は無言で首を縦に振った。

× × ×

さて、突然だがラノベ、漫画、ドラマ、アニメ上での映画館のテンプレイベントと言えばなんだろうか。

ホラーシーンで怖がった女の子が「キヤー」と言いながら腕に抱きついてきて、あわよくば柔らかい胸の感触と女の子の体温を…とかか？

それとも欧米ものにありがちな突然の濡れ場シーンに少し気まずい空気…に…けれどもどこか甘酸っぱいお互いを意識してしまっているような雰囲気になるとかか？

いや、どのイベントも素晴らしいが、俺はここで一つ『眠った女の子が体を寄りかからせてくる』てのを押したいと思う。このイベントが起こった瞬間、時間返せ！とか金返せ！とかそんな気持ちが一瞬にして大気圏の彼方へと消える。ホント男って馬鹿だね！（満面の笑み）

え？そんなイベント電車でも公園のベンチでも、なんだったら自宅でもどこでも起こるじゃねえかって？うるさい！ばーか！あんぽんたん!!そう思ったクソジャップとモ

テ男どもは今すぐ実家に消えな！いいか良くきけ（消えなど言ったのに）。

そもそも映画館という空間そのものが特殊なものだ。普通は大音量の雑音の中眠ることは難しい。だが映画館はどうだ！スピーカが大音量を発しているにも関わらず、人を夢の世界へと誘う不思議な魔力がある。薄暗い空間とスクリーンの光が独特の雰囲気。大勢の人間がいるにも関わらずまるで世界が自分とその人だけになってしまったような感覚。

え？「電車もガタンゴトンって音凄くけど眠くなるよ？」だって？「教室の雑音の中でも普通に眠くなるよ？」だって？うるさい！ばーか！あんぼんたん！黙れ（黙れ）！！
まあ……つまりだ。俺がなにを言いたいかというと。

「……起きてください、キノさん」

つまり？そう、つまりそういうことだ。

肩に掛かる少女の重み。布越しに伝わる人肌の温度。甘い匂い。至近距離から聞こえる吐息の音。

俺は、人生で男子が誰でも一度は憧れるであろうテンプレという物を体験していた。

あれだ。俺明日死ぬんじゃないかろうか。

もうなんかヤバイ。なにがヤバいって脳まで侵されているのか映画の内容全然頭に入ってこないのがヤバイ。元から頭に入ってこないタイプの内容だったのに、もうこう

なるとヒロインの娘おっぱいでかいなくらいしか頭に入つてこない。ヤバい。

あ、ゾンビ死んだ。あ、仲間が死んだ。あ、へり堕ちた。ばねー。

ああもう本当頭に入つてこない。

ていうか、これはよくない。もういろんな意味で心臓によくない。

「……キノには悪いけど起きてもらおう」

気持ちよさそうに寝ているところ、正直罪悪感はあるけど仕方がない。

そうでもしないと俺が死ぬ。

「キノ……っキノ……っ！」

俺は小声で叫びながらキノを揺らす。

うっわ、肩ちいさ。それに……少しやわらけえ。

「——じゃねえよ。キノ、起きて。キノさん、起きてください」

どうやって男にダメージを与えるあたりキノさんばねえ。

どれくらい経つただろうか。

「……ん」とキノが眠たそうに、薄くだが瞼を開ける。

眼の焦点がどこにあっているのかはよく分からないが……あと一押しくらいだ。

そう思いながら体を揺らそうとしたその時——

「キノ——おおおおおおおおおおお!!?」

『ぎやああああああああああああああああああああああああああああああ!!?』
「うわあつ!!」

映画館全体が絶叫に包まれた。

スクリーンいっぱいを埋め尽くすゾンビの顔面。

アイエエエ!!? 歯茎イツ!!? ぞんびい歯茎!!?

ひやああああ!びびったああああああああ!!

なんで今の今までスローペースだったのに突然本気出してきたんだよ!!? そういうのはもっと前半でやれよ!!? 今までずっと「うがー」「うわー」って感じだったろ? なんで後半の中盤くらい——今更本気出したんだよ!?

「てかやつべえ、マジで心臓止まるかと思った…」

「さすがにボクも驚きました…」

俺はバクバクと鳴る胸元を繰り返し撫でる。

すげえ、自分の心臓の音がやけに大きく聞こえる。いや、ラブコメ的な意味じゃなくて——

「ん?」

あれ? すごいえば今一瞬。

俺はゆっくりと視線を隣へと動かす、すると。

「あっ……」

瞳が重なった。

「あの、これは……」

キノが、俺の腕をきゅつと抱き締めていた。

——そうか、キノ目が覚めたんだ。よかった。これであのテンプレ地獄から解放される。つてあれ……？なんか腕から柔らかい感触がする。

あ、分かった。キノが俺の腕に抱き着いてるんだ。そっか。あのキノが——。

あまりの出来事に、頭の中が真っ白になる。

「えと……その、……キノ、……その」

「…………っ！」

キノも自分の状態に気付いたのか、少し恥ずかしそうにそろそろと俺の腕から離れる。

「……すみません、すこしぼーっとしていたので」

「あ、そうか。大丈夫、気にしないで」

どうやら頭がまだ半分寝ているような状態でどつきりシーンがきたため、反射的に動いてしまったらしい。

ああ、自分の心臓の音がやけに大きく聞こえる。——もちろんラブコメ的な意味

で。

俺は自分の心臓付近を押しさえつけながら、なんとかキノに笑いかける。

「眠気がなくなりました…」

「お、おう。そりゃあれ見たら、ふつう目も覚めるよなあ！」

「はい。突然でしたし…」

「ああ、突然だった、しな……」

あ、やばい。なに言っているのか分からない。

気まずい沈黙が二人の間に流れる。

なんだか目を開けていることさえ恥ずかしくなってきたので、誤魔化すように俺はそっと瞼を閉る。

そして、背もたれに深く体を預けた。

× × ×

「…」

「…」

閉じられた瞳の代わりに、鼓膜が音を拾う。

どれくらいそうしていただろうか。

いつしか物々しい音楽が消え、代わりに静かな音楽にかわっている。

そんな中。俺の内心はあれ荒れに荒れまくっていた。間違えた、どちらかというとびよんびよんしていた。

さつきからキノの柔らかい感触が頭から離れないんだけど。ヤベエよ…ヤベエよ…というか正直気持ち悪いよ俺。でもさ、仕方ないと思うんです。男が映画館で憧れるイベントを今日もう二つも体験したんだぜ。

これで落ち着いてたらそれはそれで問題だろ。そうだろ？なあ、そうだと言ってくれ。

とはいえ、もうこれ以上何が起こるわけでもなくこのまま終わって欲しいというのが本音だ。

そうじゃないと本当に死んでまう。

…ま、ぶつちやけ起こるわけねえよな。

そんなことを考えていると、

「ん？」

なんの音だ。

何故だかスピーカーからぴちや、ぴちやという水のような音が流れてきている。

そして、その音に続くように熱い男女の吐息の音が……。嫌な予感がする。

そう思い、俺は背もたれから少しだけ背中を浮かし、瞼を開ける。

そして、

「……」

固まった。

画面いっぱい広がるドッキングシーン。

モザイクも何もない、ありのままのど直球の不健全映像が大画面、大音量で流れていた。

あれ？なんでこいつら唐突にエロシーンに入ったの？直前までそんな雰囲気なかっただろ。てかなにこれ思ってた以上にガチなんですけど。

と、一瞬にして様々な言葉が頭に浮かんでは消えていく。

そして、

「て………ッ!!おーイエスじゃねえよ!」

正気に戻った。

そうだ、ここには幼気いたいけな少女がいるんだ!こんな教育上問題のある映像なんぞ見せ続けたら、PTAにぶっ殺される!!

「み、見るな！キノ！見ちやダメだ！」

そう叫びながら、俺は目隠しをしようと慌ててキノの方を向く。

だがそこにあつたのは、

「……………えーつとキノ？」

「…なんででしょうか」

既に瞼を閉じたキノの姿だった。

「…その、見た？」

その問いに、一瞬キノが声を詰まらす。

「……………見てません」

…いや、瞼を閉じてたつてことは見てから反応したつてことじゃ。…やっぱ何でもない。

「だよな…」

「……………はい」

その言葉を最後に、キノは自分の指で耳栓をしてしまった。

瞼を閉じたその表情はいつものようにきりつとしたものだったが、彼女の耳と頬がいつもより赤くなっているのはきつと……………いや、きつと気のせいだろう。うん。

仕方なく、俺も再び瞳を閉じ、手で耳栓をする。

そして、

「あ…耳栓しても普通に聞こえる」

もう一度見た少女の耳は、相変わらず赤かった。

その後、二人とも何とも言えない気分で映画館を出た。

× × ×

夜の空気が冷たい。

「じゃ、俺ちよつと買い物いつてくるから。先に休んどけ」

そう言いながらサトウさんは手を振った。

そして、やがて人ごみに紛れるように雑踏の中へ消えていく。

それを見送ってから、ボクはホテルへの道を歩き出した。

「今日はひどい目にあつた…」

何のせいかは言うまでもない。

三番目に見た死体が動く映画だ。

あれのせいで、少し恥ずかしい所を見られた。

「そもそも、あんなの聞いてない」

なんであんな大画面であんなものを流すのが理解できない。それに、サトウさんも

「見た？」じゃない。そういうことは聞かないでほしい。

「……っ」

ボクはいろんなシーンを思い出しそうになる頭をふるふると小さく振る。
そして、そつと額に手を置いた。

「…あたま痛い」

一日に何本も見すぎたみたいだ。

ホテルへ向かい、部屋のカギを回しドアを開ける。

「ただいま、エルメス」

「おかえり、キノ。どうだった？僕は今日はずつとお留守番でたいくつだったよ」

「いいじゃないか。昨日も一昨日もその前もずつと走ってたし。たまには休息も必要だよ」

「本人が望まない休憩は苦痛なだけだよ。この部屋には娯楽もないし。キノ、今からでも遅くないよ、モトラドに乗って街を駆け巡ろう！」

「いや、今日はもういい。疲れたから少し寝ることにするよ」

「えー」

「恨みんだつたらモトラドの走行が禁止されてるこの国を恨んで」

ボクはエルメスの愚痴を聞きながら、ジャケットを脱ぎ、上からいくつかのシャツのボタンを外す。

「そういえばサトウは？」

「サトウさんなら買い物に行つたよ。晩ご飯はサトウさんが帰ってきてから」

ボクは最後に腰回りを押さえるベルトを外し、傍にあつたスツールに置いた。

そして暖房機のスイッチを入れ、ベッドに倒れこむ。

「はしたないよキノ」

「別にボクははしたなくていい、見せる相手もないし」

「なに言つてるのキノ？」

「…なんでもない」

…本当にボクは何を言っているんだろう。

「はあー……疲れた……」

まぶたを閉じるとじんわりと熱を持つような痛みが広がる。

暖房機の暖かな空気と柔らかいベッドが心地よく、次第に意識がふんわりとしてくる。

「キノ、かぎ——」

エルメスの声が遠く聞こえる。

ボクはそれを思考することなく、睡魔に意識をゆだねた。

× × ×

「おーい、キノー？」

買った物袋を片手に下げながら、俺はドアをノックする。

コンコンと数度叩いてみても扉の内側からは何の反応も帰ってこない。

出かけたのか？ と思いつつも、適当にドアノブをひねってみると、

「うお、あつたけ」

扉はあっさり開いた。室内は暖房が効いているようで、ぬくぬくと暖かい空気が顔に当たる。

あ、やべえ。疲労感も相まってずっとこの部屋にいと寝ちまうかもしれねえ。

そんなことを思いながら部屋の中を見渡すと、一つのシングルベッドが目に入った。

その上には一人の少女が気持ちよさそうに寝息を立てている。

「鍵も締めずに不用心だな…つと、よ！エルメス」

「お、サトー」

名前を呼ぶと、壁の隅に鎮座しているモトラドが言葉を発した。

最初は会話するたびに「俺…無機物と喋ってる…」と何ともいえない気持ちになったものだが、俺ももうすっかり慣れたものだ。

「寝てるね」

「寝てるな」

「キノって結構タフだから、依頼があつたときを除けばこんなになるのって滅多にないんだけど。なんかした？」

「ずっと映画見てた」

まあ普通何時間もぶっ通しで見続けたらこうなるわな。運動や集中力を使うのとはまた違った方向で疲れ溜まるし。

俺はキノの傍へと近づく。

そして、彼女の頭にそつと手を伸ばした。

映画館で肩によりかかれた時から地味に気になっていたんだ。

「……………うお」

さらさらだ。

触れると、一本一本の毛髪の感触が俺の指と手のひらに伝わり、謎の感嘆が漏れた。そして、彼女の前髪をめくり。

「……………あ」

ゆつくりと手を引いた。

「……………んじゃ、俺部屋に戻るわ」

「あれ？起こさなくていいの？というかそれだけでいいの？」

「ごめんちよつと何言ってるのか分からない」

お前は俺に何を望んでいるんだ。

「こんな気持ちよさそうに寝てるんだ、寝かしてやろうぜ。」

「一応起きたら俺に起きたこと知らせるよう言っておいてくれ。そしたら飯にするから」

「はいよー」と間延びしたエルメスの声を背中で聞きながら、俺はドアノブをひねる。

彼女の前髪をめくったとき、彼女の額の隅に傷痕を見た。

俺はそれに見覚えがあった。

「やっぱ冷えるな……」

扉を開けると廊下の冷えついた空気が流れ込んでくる。

暖められた体が、指先が急激に冷えていくのを感じた。

温かい思いをすれば、またいつの日か冷たい思いをすることにだろう。

「せめて映画みたいに全部終わりが見えればいいんだけどな……」

せめて、映画のように綺麗にまとまってさえいれば。

「……なーんてな」

俺は後ろ手にそつと扉を閉じる。
そして、自分の部屋へと歩き出した。

人でなしの話（1／2）

そこには草木が広がっていた。腰の高さまである草と、高さが大人の背の何倍もある広葉樹が、鬱蒼と生えている。

そんな森の中に、まっすぐの一本道が通っていた。

人々や車両が繰り返し繰り返し踏み続けたのだろう。

土はまるでコンクリートのように固まっており、草一つ生えていない。

そんな道を二台のモトラドが走っていた。

「……あと一時間くらいで暗くなるな」

俺は空を見上げながら、ぼつりとつぶやく。

もう二時間近く走り続けているにもかかわらず、いまだに出口は見えない。

「いったいいつになったら出れるんだか」

普段ならばもつと景色を楽しんだりできるのだが……何度見渡せど視界に入るの
は樹木ばかりでいい加減飽きてしまう。

「エルメス——まだ着かないのかー」

「サトウもうその台詞聞き飽きたー」

「うるへー…俺も分かってるよ。つっても……なあ」

もし他の台詞が言えるものなら出している。こちとらもうとつくの昔にネタ切れなのだ。

「はあ…今日も野宿か」

まさか丸一日かかっても抜けられないとは思っていなかった。

森の中の野宿となると虫やらなんやらも多いし…今から憂鬱になってくる。

そんなことを思いながら、モトラドを走らせていたとき。

「ん？あれは…」

いままでずっと口を閉じていたキノが口を開いた。

「どうした、キノ」

「いえ…あそこに何か…」

「あ！ホントだ。よく気が付いたねキノ」

この中でモトラドだからと謎視力のエルメスが嬉しそうな声を出す。

「車だ」

× × ×

「おや？君たちは……？」

車両のすぐそばには、一人の男性がいた。

男は怪しげな二人の旅人：…というか俺たちに訝しげな表情を向けてくる。

「こんにちは。俺たちは旅人です！」

俺はそう言いながらモトロードから降り、軽く頭を下げた。

「随分長い間似たような景色の中走ってたら、偶然遠くからこのトラックが見えたんで。

興味半分、野次馬半分で止まりました」

「ああ、なるほどそういうことかい」

おい、興味半分野次馬半分ってところに突っ込めよおっさん。両方一緒だぞ。

そう思ったが声には出さなかった。

「その、どうかしましたか？」

「ははは、いやなに少し休憩してただけだよ。ここ数時間ずっと車に座りっぱなりだったから腰が痛くなってね」

よく言えばふくよか。悪く言えば不健康そうに太った男だった。

服はそれなりのものを着ており、旅人というよりは行商人という見た目だ。

「俺たちもです。それにずっと同じ景色が続いていると気が滅入ってしまつて」

「ははは、君たちはまだそんな歳じゃないだろう。まあ景色については私も同感だけだね」

「同感ってことは…まだ当分先は森の中ってことか」

「そうみたいですわね。だったら今日はもうここで野宿しますか。正直今日は疲れしました。これ以上走るとおしりが痛くなりそうです」

キノが俺の袖をくいくいと軽く引つ張りながら言う。

いったいいつそんな高等テクを覚えたのだろうかこの娘は。

まあ、俺もちようどこで野宿しようと思つてたところだったから、まったく問題ないんだけど。

そう思っていると、男が「お二人さん」と言葉をはさんでくる。

「まあ、ここで会ったのも何かの縁です。今晚はごちそうするから、もしよかったら旅の話を聞かせてくれませんか。私もちようど話し相手が欲しかったんだ」

「いいんですか?」

キノの口元が微かに綻ぶ。

その様子に男も「ああ」と顔にえくぼをつくつて笑った。

「ちようど近くの国で商品がよく売れて、食材も上手いものがたっぷりあるんです」

「そういう事でしたら、お言葉に甘えて」

キノがそう言うと、男は「うん」と頷いた。

「ところで…」

「なんですか？」

「いや、さつきから気になってたんですけど、あの人は」

俺はトラックの傍で佇む黒い影に目線を送る。

「ああ、アレですか。おい、ゾルドこっちへ来い」

男がそう呼ぶと、黒い影が立ち上がった。

それは体調二メートル近くはありそうな筋骨隆々とした男だった。

全身を黒い布で覆い、腰にナイフとパスエイダーを見せつけるように下げている。

ゾルドと呼ばれた男は俺たちの傍に来ると、深々と礼をした。

太った男はその様子に一度満足そうにうなずくと、

「そうだ。旅人さん、少し席を外します。晩ご飯を多めに作るように伝えてきますので。

…ゾルド、来い」

そう言って、男二人はトラックの中へと引っ込んでいった。

その様子を見ながら俺はぼつっつと言う。

「らつきーだったな、キノ」

「ええ。まさかこんなところで人と出会うとは思いませんでした」

キノが嬉しそうに言った。

「だよな。こんなところで一晩明かすことになると思って憂鬱だったけど……いやあ、日頃の行いがいいおかげかな」

「ですね」とキノが言ったのとその音が聞こえたのはちょうどだった。

トラックの方からパリンという音が聞こえてきた。

「今のは……」

「お皿でも割ったのかな？」

だがその数十秒後。

「お待たせしました。食事ができるまでは少し時間がかかると思うので、その間に旅の話をお聞かせしてくれませんか？」

男は何事もなかったかのように、顔に笑みを浮かべながら戻ってきた。

「あの、さつき皿が割れるような音が聞こえたんですけど」

「ああ、あれですか。まあ、あまり気にしないでいただきたい」

男が困ったように頭を掻きながら言う。

「それより、旅の話をお聞かせしていただけませんか」

× × ×

「ははは、面白いですな。そんな国があるのですか」

「ええ。と言つても訪れたのは随分と前のことですが」

傍にあつた倒木に腰を下ろし、キノが過去の体験を語つていく。それを男がニコニコと聞いている図がそこにはあつた。

「キノそんな国に行つてたんだな」

男はあの後一度もトラックに戻つていない。

おそらくだがトラックの中に他に料理人か誰かがいるんだろう。さつき皿を割つたのはその人だったのかと一人結論付けていると。

「旦那様。お食事の準備ができました」

そう奥の方から女性の声が聞こえた。

「おお！そうか。ゾルドさつきと取りに行つてこい！」

「…はい」

大男はそう言うと、トラックの中から次々と料理を運んできた。

「すげえ…」

「すごくおいしそうですね」

キノが、運ばれてくる料理に目を輝かせて言う。

「ははは、それはよかつた。それじゃあ料理もそろつたようだし、いただきますしょう

か」

太った男が言うように料理がすべて運び終わったのか、大男がまたトラックの隅に佇み始める。

「すいません、彼はいつしよに食べないんですか？」

「ああ、キノさん…でしたっけ、大丈夫ですよ。そういうものですから」

「…そうですか」

旅をしていればこういうことはよくある。

俺は自分にそう言い聞かせ、料理を口へと運ぶ。

そして、

「うま……っ」

「美味しい……」

「ははは、旅人さんたちのお口に合ったようで良かった」

口に運んだ料理は普通にうまかった。

俺とキノはほかの物にも箸を伸ばすが、どれも同様だ。

そりゃこんな美味しいもん食ってたら太るわ。とい俺が何故か感心していると。

「あの、この料理を作ってくれた方は？」

キノがスープを見ながら、男性にそんなことを聞いていた。

どうやらあのスープはキノにとって当たりだったらしい。

でもその気持ちもわかる。この料理を作っている人物は相当腕がいい。

「俺も知りたいです。どんな人が作ってるのか」

「ああ、構いませんよ。……おいゾルド。アレを呼んで来い」

「…はぐ」

男はのっそりと立ち上がり、トラックの中に入っていく。

そして、一人の女性を連れてきた。

「……」

キノの瞳が一気に静かなものへと変わったのを、俺は見逃さなかった。

彼女の両足は鎖で繋がれていた。

その体には服と呼んでよいのかも分からないボロボロの布きれを身にまとい、青い痣がいくつも浮かび上がっている。

顔を見ると、まだ新しいものなのか目元が赤く腫れあがっていた。

「その女性は？」

「『コレ』ですか。コレは前の国での売れ残りですよ」

男はそう言って、女性の髪を鷲掴む。

そして、俺たちに彼女の顔を突き出すように見せた。

「見えるでしょう？この顔の傷。このせいで商品の価値が下がってね。たまにソルドが殴るんですよ。出荷前には殴るなどいつも言っているんですけどねえ」

「そうですか……。それは困ったもんですね」

「ええ、本当にツ!!」

突如。男が女性を殴った。拳が腹に埋まる。

その光景に俺は思わず言葉を失う。

「いつまで経っても金になりやしらない!」

だがそんなことに気付いてか、そうじゃないのか、男は女性を殴り続けた。

しばらくすると、女性がお腹を押さええながら、地面にうずくまってる。

そして、「けほっけほっ」と咳をする音が聞こえ。

「……あの、ちよつといいですか?」

俺はすつと、まつすぐ手を挙げた。

「はい、なんですか?」

男が女を殴ろうとする手を止める。

「あのー実はですね。俺宗教上の理由で奴隷と一緒に飯を食べてはいけないうつてことになってるんですよ」

「なに?」

「だからですね、その女……ソレを食事中は視界に入らないように、どけといてくれませんか」

俺がそう言うと、男はしばらくきよんとしていたが、やがて「やはり旅人はいい」とニツコリと笑った。

「ははは、なるほどなるほど！それは失礼しました」

「いえいえ、頼んだのは俺の方ですし、本当にすいません」

「いえ、お構いなく。つと……お前!!今すぐ消えろ!!これ以上俺にいらん恥をかかせるんじゃない!!」

男は女の髪をもう一度乱雑に掴んでから、たたきつけるように地面に突き放す。

砂が顔を擦ったのだろう。女性の顔には新しい赤い擦り傷ができていた。

「……………はい」

女性は腹部を押さえながら、ゆっくりと立ち上がる。そしてこちらに一礼をしてから去っていった。

いつものことなのだろう。護衛の男は、一連の出来事をただ黙って見ていた。

トラックの中へと消えていく女の姿を見ながら、男がひとりでに喋り出す。

「アレはすこし前に私が捕まえたんですよ。アレがいた国は誰とでも仲よくなれる、なんてことを言いながら城壁を撤去してまして」

男がコップを机に置く。

「家が木材でできていてよく燃えました。出てきたところをパースエイダーで動けなくして……ああ、あれは楽しかったですな。やはり狩りをするなら、どんな動物よりも人間が一番いい」

俺は女性の作った料理を口に含む。

キノもまた黙って話を聞いていた。

「アレも捕まえたばかりの時はまだ小綺麗だったんですが……殴るうちに反応は鈍くなるし。この間目の前で親を殺したら、それこそ人形のようになってしまいました。今となったら料理くらいしか取り柄がありません。本当……いつになったら売れるのやら」

男が眉間にしわを寄せ、困ったように言った。

「いいご趣味をお持ちですね」

「ええ。そうでしょう」

俺の皮肉を意に返した様子もなく、男がうんうんと首を振る。

「ところで……そんなこと俺たちに言っただいいいんですか？」

「……どうということですかね」

「いやね」

俺は肉に刺さったフォークを抜き——その先をスツと男へと向ける。

「俺たちが今の話聞いて『女性がかわいそうだ！』ってアンタに殴りかかるかもしれないよ？ なんだって俺らは善良な旅人ですから」

銀色の先から濁った茶色のソースがつうつと垂れ、地面へと吸い込まれていく。

それを見届け、俺は再び肉に深く、深くフォークを埋めた。

だが男はなにが楽しいのか、そんな俺の話聞いて「ははは」と笑う。

「ええ。ええ。なるほどそうですね！！ たまにそんなことを言ってくる旅人もいました！
——……でも、口だけですな」

「なに？」

俺の真似をするように、男が料理にフォークを突き刺す。

「私はね、旅人を『信用』しているんですよ」

「……『信用』？」

「ええ、そうですお嬢さん。長いこと人間を商品にしていると、やれ人権やらなんやらと言ってくる人間もいるんです。ですがいざ私が『だったら買いますか？』と聞くと、彼らは『金がない』『スペースがない』と言って諦めるんですよ————本当におかしいですよ？」

今日何度目になるか。男が笑う。

「助けたいのなら私から無理やりにも強奪すればいい。でも、しない。——……結

局彼らは人権を叫んでいるのに、彼らもまた奴隷を『商品』と見ているんですよ。人を金だと考えている。旅人なんかはメリットメリットで行動する生き物ですからね」

男はそう言うのと、大口を開けて肉にかぶりついた。

そして、もしやもしやと咀嚼して呑み込む。

「特にお二人さんは…随分と長いこと旅を続けていますね。そして、随分と大勢殺している。アナタ方のような人の命を金で考えられる旅人は——特に信用できる」

「なるほど。参考になります」

「ほー、興味深い話でした」

「すごいねーおっちゃん！物書きとしても生きていけるんじゃない？」

三者三様の旅人の言葉に、男は照れ臭そうに頭を掻く。

「ははは、だとしても書けるのは一冊だけですな」

そんな男を視界に収めながら、俺は。

「これ美味いっすね」

女性につくった料理を口へと運んだ。

「ホント、美味いっすね」

× × ×

和気あいあいとした時間はあっという間に過ぎ、気付けば並べられた皿の中身は空になっていた。

「おい、ゾルド。アレと一緒に皿を下げる」

「…はい」

トラックの中へと歩いていく大男の姿を、男はしばし満足そうな表情でしばらく見ると、「では私は少しトイレに行つてきます」と言つて茂みの奥へと消えていく。

「それじゃ、俺たちもそろそろ寝る準備するか」

「そうですね」

そして、俺たちは俺たちで寝袋を出したり、明日の為の道具等の準備を始めた。いつしか太陽は完全に沈み切っており、空には欠けた三日月が浮かんでいる。

オレンジ色のランプが辺りを薄く照らし、その周りに数匹蛾が集つていた。

どれくらい経つただろうか。

ちやらちやらと鎖を引き摺る音が小さく鼓膜を揺らした。

そして、その音は俺たちの目の前で止まる。

「なんか用ですか」

俺はパースエイダーを整備する手を止め、顔を上げる。

やはりというか、そこにはあの女性が立っていた。

彼女は虚ろだった瞳に、微かな希望を宿してこちらを見ている。

そして、意を決するように口を開いた。

「……あの、私を買っていただけませんか」

「断る」

俺は布をカバンの上へ置き、パースエイダーをホルターへとしまふ。

女性は最初からそう言われるのが分かっていたかのように、そつと顔を伏せた。

「一応、理由をお聞きしてもよろしいですか……？」

「……一つ。俺たちにそんな金はない。二つ。子供ならともかく、大の大人を乗せるスペースなんて俺らのモトラドにはない。三つ。もし乗せれたとてもその分食料を減らすことになる。まだ聞くか？」

「……いいえ」

女性は空を見上げ「はー」つと息を吐く。その瞳には暗い諦観が浮かんでいた。

「まあ、そういうことだ。俺たちに買って貰うつてのは諦めるんだな」

「……ええ……申し訳ございません。今の話はお忘れください」

女性はそう言つて、俺たちへと頭を下げた。

やがて、

「おい！そこで何をしている!!」

随分と長かった便所が終わった男が、腹に着いた脂肪を揺らしながら帰ってきた。

「…いえ、何でもありません」

最後にもう一度、女性は俺たちにべこりと頭を下げ、ふらふらとした足取りでトラツクへと戻っていく。

その背中に向かつて俺は。

「なあ、ちよつといいですか」

「……………はい、なんでしようか」

「料理、美味かった」

「……………っ!」

その言葉に女性が振り返る。

そして一瞬、その顔をくしやつとゆがめてから。

「…そうですか、ありがとうございます」

口に小さな笑みを浮かべ、また歩き出した。

鎖の音が遠ざかっていく。

「また後でな」

俺は、覚悟を決めた。

× × ×

何時間たっただろうか。

周辺のランプの光はすべて消え、聞こえてくるのは虫の音だけとなっている。

頃合いだ。

俺は寝袋からのそりと這い出て、暗闇の中、あらかじめ近くに置いておいたランプに火をつける。

すぐ近くで、寝袋のなかで寝息を立てるキノの姿が映った。

俺は彼女を起こさぬように、静かに自分のカバンの中から必要と思われるものを次々と地面に置いていく。

そして、ある程度それが終わると、パースエイダーに手を伸た。

「行くか」

「どこへですか」

心臓が大きく跳ねた。

慌てて振り向くと、寝ていた筈のキノが起き上がりこちらを見ていた。

背中にじつとりとした汗が流れる。

だが、俺はそれを外面に出さずに「いや」とキノに笑いかける。

「念のために荷物をもう一度確認してるだけだよ。もしかしたらあのおっさんになんか取られてるかもしれないだろ？」

「それなら大丈夫です。ちゃんとボクが耳を澄ませてました」

「……そっか、なら問題ないな」

キノの返しに、俺は早くも笑みを張り付けるのをやめる。

キノはそんな俺に静かな瞳を向ける。

「ええ。問題ないです。だからサトウさんは寝ても構いません。今夜はボクが起きているので。それで、どこに行く気なんですか」

……最初っから気付かれていたのか。

こうもあっさりとはバレたことに、自分の浅ましさに俺は深く息吹く。

二人の間に沈黙が流れる。

風の音がやけに大きく聞こえ、体が冷たいものが食い込んでいくような錯覚がした。

やがて、キノが普段と変わらないトーンで、

「助けに行くんですね。あの女性を」

そう口にした。

無意識にパスエイダーを持つ手に力が入る。

「止めないでくれ」

「……彼女と同じ売られた人間はどうするんですか。これから先も奴隷の人に会うたびに助けようとするんですか」

ああ、そうだ。その通りだ。

東に飢える人間がいれば食料を与え、南に喉の乾いた人間がいれば水を与える。北に、西に、——そんなことできるわけがない。そんなこと分っている。

それでも俺は。

「それでも俺は、目の前の一人くらいは助けたい」

俺はキノの瞳を鋭く見据える。

「別についてこなくてもいい。……見逃してくれ」

分かっている。分かりきっている。この状況で間違っているのは俺の方だ。

昔とは違い、一人で旅をしているわけではない。今は『キノ』という同行人がいる。にも関わらず、相談もせず独断で行動しようとしている。

そもそも女性を助けたいなどというのがただの我儘でしかない。

だから、

「ダメです」

キノの返答は予想できたものだった。

そのことに俺は唇を噛む。

「そっか……」

自分の声が宙に虚しく溶けていくのを感じた。

自然と、パースエイダーを握る手から力が抜けていく。

そんな俺の様子を、キノは黙って見ていた。

彼女はのそりと寝袋から起き上がる。

そして、その手にパースエイダーを握った。

そして、

「ボクも一緒に行きます」

そう言った。

「……………は？」

今、なんて？

眼を大きく見開き、パクパクと口を開閉する俺に、キノはそつと微笑み返す。

「……なんとなくこうなるだろうって思っていましたから」

その表情を見たのはいつ以来だろうか。そうだ、初めて会ったあの日。

キノの言葉に、もう冷たさはなかった。

「……本当に、サトウさんはお人よしですね」

その言葉に、再び心臓を掴まれる。

一瞬、言葉が出なくなる。

「……………キノ」

キノは自分の鞆から幾つか物を取り出すと、腰を上げる。

「ただ、次からこういった行動はやめてください」

「……………ああ、悪かった」

本当に、なんて…頼もしい同行人なんだろう。

それをひしひしと感じながら俺は「そういえばさ、キノ」と彼女の名を呼ぶ。

「はい、なんですか?」

「あの女性の料理美味かったよな」

俺の言葉に、キノは「そうですね」と頷く。

「あのトラックにはたんまりと食料があるんだよな」

「……………そうですね」

「さすがにトラックは貰えないけど——それは偶然その場に居た誰かが拾ってくれれば

いい」

「そうですね」

「『旅人はメリットデメリットで行動する生き物』だったよな」

「そうですね」

キノの表情は、真剣なものだった。
俺もまた気を引き締める。

「……ありがとう。キノ」

「どういたしまして」

人でなしの話（2／2）

木々の隙間から僅かに漏れ出す月明りが、黒い世界を微かに照らしている。

そんな暗闇の中、俺とキノは足音を殺しながらゆっくりと移動していた。

別にあのおっさん…デブのことを警戒しているわけじゃない。あの手のタイプは自分の側になるとパニックを起こして逃げ出す。

だから、俺たちが警戒しているのはあの大男の方だ。

一見すると図体がデカいだけでさほど脅威には感じられないが、あのタイプはあのおっさんとは違いまだ脳みそのある行動が取れる。

もし俺たちの目的が女性だと悟られ、彼女を人質に取られると厄介だ。

「サトウさん、そのパースエイダーの中身は…」

「ゴム弾だよ。さすがに命までは取る気はねえし」

「なんでゴム弾なんですか？普通に実弾でいいと思うんですけど…」

「キノってさらつとえげつないこと言うよね…」

もともとトラックとの距離がそこまで離れていたわけではないので、俺たちはあつという間にトラックの傍に到着する。

俺とキノは物陰に体を寄せ、そっとトラックの周辺を見る。

「いるな」

定位置なのか、トラックの入り口付近に大男が座り込んでいた。

まだ冬ではないとはいえ、夜の空気は寒い。そんな中毛布も掛けずに見張りとは、随分と世知辛い対応だ。

それでも男は眠っているのか、首を垂らして微動だにしていなかった。

寝ているのなら、行けそうか？

そう思いながらも、念のためパスエイダーのセーフティを外す。

小さいころ通学路の途中で大きな犬を飼ってる家があった。その傍を通る時もこんな風に緊張したっけ。と少し懐かしさを覚えながら、ゆつくりと男の傍へと近づいていき。

「おい」

俺は銃口を男の頭部へと向けた。キノもまた速かった。

一瞬にして二丁のパスエイダーが男の頭部に向けられる。

にも関わらず、

「……」

男は静かだった。

俺は声を潜めながら、けれど強く男に問う。

「…どういふことだ」

男は体勢を変えることなく、俺へと黒い瞳を向ける。

「何がだ」

何がだ、じゃない。

「…なんで武器を持っていない」

そう、男は丸腰だった。

食事中に俺が見た時には、まだ持っていた筈だ。服の下に何か隠し持っているのか。

それとも他の意図があるのか。

警戒する俺たちに向かって男はふっと笑う。

そして、ゆつくりとした動作で立ち上がった。

「…必要ないからだ」

まっすぐな瞳が俺たちを見据える。

そして、

「クレアを頼む」

男はそう言って、深く、俺たちへと頭を下げた。

その言葉の意味が脳まで浸透すると、自分の肺から空気がすうっと抜けていく錯覚が

した。

短く告げられた言葉に、男から語られた彼の姿が、答えをもつて明確な形となる。

……そういうことか。

「キノ」

「はい」

「見張り頼む」

「分かりました」

俺はサツとその横を抜け、トラックの扉を慎重に開ける。

「俺は、何もできなかつた。そのせいで彼女を深く傷つけた」

背中に大男の言葉が届く。それは重く、後悔の念に沈んでいた。

× × ×

女性はすぐに見つかった。

厨房代わりとして使われているであろう、調味料や食料が並ぶ部屋。

窓から差し込む月明りにぼんやりと照らされたその部屋に、彼女はいた。

壁の隅に、まるで赤子のように小さく丸まって目を閉じていた。

「……起きてください」

俺はそつと彼女の肩に触れ、左右に揺らす。

眠りが浅かったのか、彼女はすぐに俺の気配に気づき「誰…っ」と怯えたような声を発した。

「大丈夫です、助けに来ました」

「…た、旅人さん……？」

壁の隅へと寄つた彼女の傍にしゃがみ込み、俺は呟く。

「やっぱり鍵がかかつてるな」

彼女の足は、短い鎖によつて壁と繋ぎ合わされていた。当然、脱走防止用に鍵もかかつている。

彼女はしばし呆然と俺を見ていたが、やがてハツとした様子で口を開いた。

「あの…旅人さん」

「はい」

「あの、か、彼は…ッ、ゾルドはッ！」

彼女の口から出たのはあの大男の名前だった。

赤く腫れた顔で、女性を叫ぶ。

「旅人さん彼は悪くないんです！彼が私を殴つたのは、全部私の為でッ——私が売られ

ないように、私を商品に出さないためにッ！」

やはりそうか。

「彼は……彼は幼いころからずっとあの男の奴隷でした。そのせいで、彼は……つ。だから、だから……ッ、彼を助けてください!!」

俺は彼女の叫びを黙って聞いていた。

……幼いころからずっと鎖に繋がれていた象は、大きくなって力が付いてもその鎖を引きちぎれなくなる。ふと、そんな話を思い出した。

俺は彼女の顔を見ながら「大丈夫です」と言う。

「彼は無事です。怪我もしていませんから」

そう言うのと女性は静かになった。そして安堵の吐息と共に「良かった……」と嗚咽を漏らし始めた。

きっと俺がああ男性と戦ったとも思ったのだろう。

……さて。

あとはこの女性を外に連れて行けば終わりだ。足の鎖はやりようによつてはどうとでもできる。

さつて……大詰めだ。

「少し耳をふさいでくれますか？」

俺は女性にそう告げると腰を上げる。

「……………え？……………はい」

そして、女性が耳をふさぐのを待ってから。

——パスエイダーを撃った。

一瞬部屋が明るく照らされ、銃声が轟き、空気を震わす。

突然の出来事に女性が「きゃあッ!!」と頭を押さえ、蹲った。

そしてその数秒後、ばたばたと慌ただしい音が扉の向こう聞こえ、やがて扉が勢いよく開かれ、奴隷売りの男が顔を出した。

「な、なんだ！一体何の騒ぎだ!!」

奴隷売りの男は、ひどく混乱しているようで俺を見ると、

「ぞ、ゾルド！俺を守れ！」

と、そう言ってきた。

だが、やがて暗闇に浮かぶシルエツトが自分の護衛のものとはまるで違うものだと気付いたのだろう。

「お、お前は……っ」

「どうもこんばんは。随分と防音性のある……いい部屋に住んでるみたいだな」

瞬時に状況を理解したのか、俺の予想通り男は即座に自分の部屋へと引っ込んだ。

数瞬遅れてキノと大男が室内に顔を出す。

「クレアッ!!」

男はそう言うのと、即座に女性へと駆け寄る。

「サトウさん! いったい何を……」

一方のキノは何故銃声を鳴らしたのか。と言いたそうにこちらを見た。

いや、言おうとしているのだろう。

だから、俺はそう言葉にされる前にキノの言葉を遮った。

「二人を頼む」

俺は扉を開け、奥へと進む。

案の定その奥にある扉が開いており、その先に森の中へと逃げる男の姿が見えた。

× × ×

「ひいつ、ひいつ、ひいッ」

「普段運動をしない足がミシミシと嫌な悲鳴を上げる。肺から吐き出される空気が酷く熱い。」

だが、足を止めることなどできない。

止まればその瞬間追いつかれる。

背中をびったりと追つてくる、草と葉を踏む音。細い枝を折り、土を蹴る音。

自分の頭の中を疑問が埋め尽くす。

一体どこで間違えた。一体どこで間違えた。一体どこで間違えた。旅人は冷たい生物のはずだ。旅人はひとのことを金でしか見ていない。旅人は、旅人は——。

「…………ぐおッ!!」

酸欠気味の脳を無理矢理動かしていたせいだろう、木の根に足を取られ、俺は顔から地面に倒れる。衝撃と共に口の中に砂の味が広がった。

「ぐ、ううっ……。はあっ……。はあっ……。はあ……」

すぐさま立ち上がろうと腕をつくが、体が動かない。

「クソがあ……」

額をまるで鉛のような汗が伝う。

ぐっしよりと濡れた手のひらに大量の土が付着する。

足音が止まった。

「鬼(おに)は終わりか?」

あいつ。アイツの声だ。

「あ……………ふっ、つぶざけるなあッ!!」

土の着いた手のひらをギイツと握り、俺はパースエイダーに手をかける。

そして、闇に向かって引き金を引いた。

「な、なんなんだお前は！お前は！」

引き金を引く。

「どうしてそんなに怒っている！あの女にでも惚れたかッ!?」

引き金を引く。

「それとも金でも貰ったか!!」

引き金を引く。だが、

「クソっ！くそ!!」

とうとう弾が切れたのか、カチカチと乾いた音だけが返ってきた。

俺は慌ててポケットをまさぐる。だが、そこから出てくるのは糸くずだけだ。

「……………」

その事実にも、体中にまるで血管に冷水を流し込まれたかのような冷たい感覚が広がっていく。

旅人が目の前にいた。

逆光によって影を落とした男の顔は真っ黒に染まっている。その中で、片手に持ったパースエイダーだけが黒く輝いていた。

「…ああ、いいぞ！撃つのなら撃て！！人殺しが！！」

「ひとつ訂正しとく……。俺は人を殺さない」

「…はあ……。う？…ははは！じゃあなんだ？そのパースエイダーは飾りか！？それともゴム弾か！？それとも俺を見逃すってことか！？」

旅人がゆつくりと自分のパースエイダーを持ち上げる。

「ああ、ゴム弾だ」

そして、

「そう…キノには言つてあつた」

体内を爆音が通り過ぎた。

撃たれた。そう気付くのに時間はかからなかった。

「『動けなくして』、だったか？」

自分のズボンに丸い点ができ、突き抜ける感覚。縮小する感覚。破裂する感覚。じつとりとしたものが体内から流れ出す。

地面が赤く染まり始めた。

「ああああああッ！！あああああがああああッ！！」

感じたこともない激痛が、俺の足を駆け抜ける。

「脚がッ……。！！脚がああああッ！！」

俺は体を丸め、撃たれた部位を力一杯押さえつける。

「この人殺しつ、人殺しツ！人殺しがあああああああツ!!!」

俺の絶叫に、旅人は「は？」と吐き捨てるように言う。

「ちゃんと聞いてたか？俺は人は殺さないって言ったんだ」

再び、銃声が鼓膜を揺るがせる。

「お前は人間じゃない……『人ひとでなし』だ」

網膜の裏で、火花が散った。

「いいいいいいいいいいいいいいッ!!」

頭の中が一瞬で真っ赤に染まり、繰り返し火花が散る。

自分の胴体に、楕円型の赤い点がいくつもできた。

体内から、「こぶっ」と何かが流れ出しているような音が聞こえる。

「ああ、ひっ、あつ、あッ、ああああッ!!」

「喚くな。急所は外してる。まだ殺さねえよ」

その言葉に行動に、再び頭の中が真っ白になった。

それは、つまり。

「じゃあな」

旅人が俺に背中を向け、ぎっぎと歩き出す。

「分かった」

——あ？

俺の耳がおかしくなったのか？そう思っていると闇の中から一丁のパスエイダーが投げ込まれた。

月明りを反射する黒いそれに、俺は数瞬目が釘付けになる。

なんでここに。そんな思考が一瞬浮かび、消え失せる。

「ぐう……ッあああつ、あああ……ああ!!」

アレさえあれば。

俺は血液で赤く濡れた手をパスエイダーへと伸ばす。

足りない距離を芋虫のように体を地面に這いずらせながら進む。

アレさえあれば。

死ぬる。

痛みがなくなる。

終わる。終われる。

歯を食いしばり。

鼻水を垂らし。

嗚咽を垂らし。

血液を垂らし。

唾液を垂らし

自己への尊厳も。旅人への憤怒も。在世への執着も。そんなものはすでにない。

ただ目の前にぶら下げられた人參、パースエイダーへと手を伸ばす。

やがて、

「ああ……」

指先が冷たい無機物に触れた。

血の気を失った指でグリップを持ち、銃口を自分の頭部へ向ける。

やつとだ。

やつと。

——……やつと。

銃声が響いた。

だが。

「ああ……？」

死ねない。

「なん……で………」

撃った頭部が鈍器で殴られた様な痛みを伝える。

だが、痛みだけで、死ねない。

死んでいない。

「……ゴム……弾……？」

やがて、自分のほかに誰もいなくなった森の中で俺は呟いた。

足元までコロコロと転がってきた、鉛ではない小さな塊を見て。

「あ、ああ」

考えるよりも先に、声が出た。

「あああ、あああああ！」

叫びが出た。

「あああああああああああああああッ！！！！」

絶叫が出た。

「この、—— 『人でなし』 があああああああああああああああああッ！！」

旅人の姿はもうなかった。

× × ×

「あの、本当に大丈夫なんですか」

「そうですよ、もう少し寝ていた方が」

「クレア、旅人さんたちもそう言っている。今日はゆつくり休んで…」

「大丈夫ですよ。なにより——『私』が作りたいんです」

女性はそう言って、俺たちに笑いかけた。

× × ×

森から帰ってきた俺が見たのは、鎖のなくなった女性と、彼女を抱きしめる男性の姿だった。

女性がしきりに大男の名前を呼び、大男もまたそうだった。

キノに聞くと、二人はずっと前からお互いのことを意識していたらしい。

けれどゾルドは骨の髄まで過去が浸透しており、あの男に反抗できなかった。女性も

また、そのことを知っていた。

そんな日々が続いたある日。あの男が彼女の両親を殺した。本当に、たった数日前までの出来事だった。

目の前で両親が死に、悲しみに沈んだ女性の姿に、男はあの奴隷商を殺すことを決心した。

だが、殺せなかった。

そんな日々が続いたある日、俺とキノがやってきた。

後は知っての通りだ。

「お二人とも、本当にありがとうございました」

『元』奴隷だった女性がキノの手を握りしめながら何度も何度もお礼を言う。

「いえ、こちらこそ。朝食美味しかったです」

それにキノも柔らかい表情で応じている。

「旅人よ、ありがとう。この恩は一生忘れない」

「いいよ、別に忘れても。そんなことよりクレアさんとのこれから先のことを考えてくれ」

一方俺は、女性ではなく筋骨隆々とした男の手を握っていた。ちくしょう。

何が畜生って、よく見たら大男ゴイツの顔がダンディー系なイケメンだっただよ。ち

くしょう。

しかも今日判明したんだがコイツ料理もできんだぜ？なんだよ。イケメンだよ。俺がもし女子だったら完全に惚れてたよ。

——……イケメン爆発しねえかなあ……。

そんな人として腐りきったことを考えながらそつと手を離すと、彼は今一度俺へと笑いかけてきた。

イケメンエ……。

「それじゃあ、俺たちはもう行く」

「旅人さん……つ、本当にありがとうございます」

「こちらこそ、朝食ありがとうございます」

「お二人ともお元気で」

頭を下げる二人にそう言うと、彼らはゆっくりとトラックの方へと歩き出した。

ぱたんと扉が閉まり、エンジンの音が鳴り響く。

扉が閉まり、エンジン音と共に車両がゆっくりと動き出す。

「本当に、本当にありがとう!!」

窓からクレアさんが体を出し、大きく手を振る。

俺たちも、それに手を振り返す。

しだいにトラックは小さくなっていき、やがて木々に遮られ視界から消えた。

「二人とも幸せそうでしたね」

「…そうだな」

俺はトラックの去っていった方向をじっと見つめる。

「サトウさん」

「ん？なんだ」

「もつと食料を貰っても良かったんじゃないですか？」

「そういうキノは貰いすぎなんじゃないか？」

キノの方を見ると、脚もとにエルメスに載せきれなかったという食料の袋がでんと置かれていた。

「これはサトウさんの分です」

「え？」

「少なくとも取ったことくらい分かってましたから。彼女たちからも『渡しておいてくれ』と頼まれました」

キノはそう言うのと、呆れたような目で俺を見た。

その瞳に俺は「うっ」と言葉を詰まらせる。

いや、別に次の国はそう遠くないし、それに無駄に多めに貰ったところで腐らせるだ

けだし。

ああ、だからやめて！そんな目で俺を見ないで！！

しどろもどろとする俺の姿に、キノは溜飲が下がったのか、ふっと表情を解いて、

「サトウさんは——本当にお人よしですね」

そう言った。

俺はそんな彼女の表情に、また違う意味で言葉を詰まらせる。

そして言葉ではなく吐息で返事をした。

「…どーだか。もう行こうぜキノ」

あいまいな俺の反応を照れ隠しとでも受けとったのか、キノが口元を柔らかくして、

俺を見た。

「そうですね。行きましょう」

モトラドのエンジンが鳴った。